
わけあり姫と偽りの騎士

闇谷 紅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

わけあり姫と偽りの騎士

【Nコード】

N0171S

【作者名】

闇谷 紅

【あらすじ】

思い詰めた一人の騎士が発した一言が、全ての始まりだった。告白に頭を抱える幼なじみであり、かの騎士に仕える侍女。

騎士には秘密があり、騎士が思いを寄せる人にもまたとんでもない秘密があった。

騎士の恋は叶うのか、その時幼なじみの侍女は？

隠された秘密と恋に翻弄される侍女、アンナ。思い人と騎士の恋物語に振り回され、アンナ苦悩する。

始まりで序章

「なあ、もし自害するなら私はどっちの作法に則ってすべきだと思う？」

アンナ・ワレットは頭を抱えていた。いや、途方に暮れていた。先程返ってきた主がすわった目をして、問うたのだ。

「思わず戻ってきてしまったのもまずかった」

などとも呟いていた主人は貴公子然とした衣服に身を包む金髪碧眼の美少年で、整った顔立ちには思わず見とれる同僚もいるくらいだ。見目麗しい異性に目を奪われることは、年頃の少女なら全然おかしいことはない、アンナは思う。もつとも、姉弟同然に育ったアンナは同僚達とは違いとある事実を知っていた。

「検分されることを考えるとやはり女性として……」

そう、主人は少年ではなく、少女なのだ。わざわざ男装をしている訳だが、これにも訳があつて……一言で言うなら『兄の代理^{かけむしや}』なのだ。

元々主人は、双子に生まれたと言うだけで人の目に触れることなく殺されるところだったのだが、主人の祖父がこれを止めたのだ。

「殺すことなどいつでも出来よう。万が一の時の影武者として育てておけば、何ら役に立つ日が来るやもしれん」

人の情とも肉親の情ともかけ離れた打算的な理由で。もつとも、主人を殺すべきとする根拠も双子が生まれると家が二分されて内より滅びるという古くさい言い伝えが理由なのだから馬鹿馬鹿しい限りである。

ともあれ、そう言うわけで彼女の主人の言う作法とは、騎士としての自決か淑女としての自決かと言うことになる。^{レイルことレイラ}

「まさか、秘密が」

性別を偽り兄の代理をしていることが誰かにばれたのだと、アンナは思ったのだ。

彼女の仕える主人、レイル・ギルバーオレストは騎士として女人禁制の騎士団に所属している。もし女性だとばれたのならば大問題である。主人の態度というか口をついて出た言葉も領けようものだった。

「やはり、ここはお父君にお伺いを立てた方が……」

こんな事態の処理が一侍女に過ぎないアンナに出来ようはずもない。主人にはアンナが寝不足の時に使用している薬を盛って、とりあえず眠って頂いているが、早馬を飛ばしても、何らかの答えなりリアクションが返ってくるのは明日の朝以降になるだろう。

「どうしてこんなことに……」

貴族位を持つ者が主人である王を偽り身代わりを立てていたことが露見したとなれば、処罰はどこまで及ぶのか。お家取りつぶし、などと言うことになれば路頭に迷う者も多数出る。

(……レイラ様)

だが、アンナにとって大切なのは、己の身よりも主人だった。状況次第だがあの思い詰め様からすれば、その主人が命を持って償わなければならないほどことは重大なだろう。

「……日が沈む」

絶望にうちひしがれながら見る窓の外は、山に接した夕日によって何もかもが茜色に染まっていたが、アンナにはこれがギルバーオレスト家の落日に見えたのだった。

「若君が何か取り返しが付かない失態を犯したようだ」

と記した手紙を本家の当主のもとへ運ぶ早馬が出発したのは、アンナが窓に背を向けた時のこと。

「はっ、せやつ！」

知覚したのは、騎手の馬をせかす声を耳にしたからだった。

「月の照らす、時にだけと……」

レイルはいや、レイラは夢を見ていた。

（そうだ、この歌だ）

霧の中に響く歌声を頼りにレイラは声の主を捜す。どこか切なげで、思わず胸を締め付けられるような歌声にレイラは出会った時から惹かれていた。最初に目に出来たのはシルエットだけ、次に出会った時にはそれが自らの仕えるべき姫であることを知って。

（あれは……）

やがて霧の中に現れた人影に、胸中で喜びを覚えつつもレイラは近寄って。

「あつ」

緊張のあまり足を取られた。バランスを崩して1秒に満たぬ間レイラは空中を泳ぎ。

「姫……」

身体を支えるものを求めて伸ばした手が、あろうことか、振り返った姫の胸へと。

「いやああつ」

「うわあつ」

絹を引き裂くような悲鳴に、反応して自分のあげた声でレイラは目を覚ました。

「夢か」

拒絶された事への衝撃よりも大きかったのは、思わず行動に出ていた自分自身を知覚した時の衝撃だった。レイラには自分の行動が信じられなかった。だが、仕えるべき主人の悲鳴と、何かを恐れるような表情は頭の中から出ていつてはくれない。

「そうか、私はふられたのだな……」

そもそも、女性同士と言うところで何かが間違っているし、間違っていたとレイラも思う。むしろそれまでのレイラにとって同性愛

などというものは理解の範疇外にあったのだ。

「ふられた、などというのも不遜なことはわかっている」

もし、自分が起きたことに気づきベッドに横たわったまま呟いた言葉を幼なじみである侍女が聞きとがめたならレイラはそう言うつもりだった。

「でも、今も好きなんだ」

姫が愛おしく、同時に拒絶されたことからくる絶望感が他の全ての事柄に無頓着にさせていた。

「つまり、護衛を仰せつかった王女様に邪な思いを抱いた上、胸を揉もつとして悲鳴を上げられた、と言うわけですね」

「邪な気持ちではない、そもそも事故だったんだ！」

アンナは頭を抱えていた。どこで教育を間違えたのだろうか。

そもそも、アンナは侍女であって教育係というわけではない。だが、よりもよって主人が王族に無礼をはたらくとは。十分マズイ、激しくマズイ、果てしなくマズイ。

「姫様！」

「姫様、どうかなさいましたか！」

「ご、ごめんなさい。ちょっと足を取られて転んでしまっただけです」

王女の悲鳴を聞きつけて駆けつけたレイラの同僚や侍女達に王女はそう取り繕い、庇ってくれたという。

「それはお咎めなしということなのでは？」

「そうじゃない、あの何かに怯えた目がまぶたの奥から消えてくれないんだ」

「つまり、レイル様が思い詰めていらしたのは……王女様に拒絶されたからと」

「初恋だったんだぞ！ まさか、こんなにも苦しいものだったとは……」
あきれ顔で質問を続けていたアンナにもそろそろ我慢の限界が来ていた。主人とはいえ、幼なじみで乳姉妹なのだ。

「……レイル様」
「な」

乾いた音がした。

「処罰は覚悟の上です、ですが長年お側にお仕えした身として言わせて頂きます」

「アン……ナ？」

「何考えていらっしゃるんですか！ お家の一大事になるところだったんですよ！」

本当は仕える家などどうでも良い。大切なのは、主人だけだった。だとしても、許せない。

「それに……、それに……」

アンナの声は震えていた。

「すまない、アンナ」

ポンッと肩に手を置いてレイラは謝罪の言葉を口にし、指で頬を伝う幼なじみの涙をぬぐう。

「私が、愚かだった」

「レイル様……」

アンナは密かに安堵した。わかってくれればそれで良いとも。王女が主の無礼を見逃してくれたのだ。これで主も心を入れ替えて――
。

「死んでしまつては元もこうもないな。『恋は全力突撃、当たって砕ける、波状攻撃！』だ」

「まてい」

何もわかつちゃ居なかった。

「まずは姫の好みを知るため、密かに影から見守らせて頂くか」

しかも、まさかのストーキング宣言である。

「レイル……様？」

アンナの災難はおそらくこの時から始まったのだろう。

「任せておけ、騎士は斥候の役目を担うこともある」

そう簡単には見つからないとずれた答えを返す主人をアンナは呆然と見つめるだけだった。

始まりで序章（後書き）

初めましてですね。

人様のお話を読むだけでなく、たまには書いてみようかなと思いつて、無謀な挑戦を始めました。

楽しんで頂けたなら何より、つまらなかったらしょんぼりにございます。

へっぽこダメ作者の書くお話ですが、作者同様生ぬるい目で見守って頂けたらな、と思っております。

姫君の事情

「姫様……」

かすれた声に王女は振り返る。声に若干の違和感を感じたのは、気のせいだろうか。

「貴方は……」

初めて会う護衛の騎士。名前は確かレイルと名乗って——そこまですり出した王女の思考を妨げたのは、小さなアクシデント。

「あつ」

ぎこちなくこちらに踏み出そうとした騎士の足が何もないはずの場所で引つかかる。ただ、転んだだけなら初めて自分と対面するあまり緊張してのこと、と余裕を持って見守れたことだろう。

「……っ」

だが、空を泳ぐように滑稽なしぐさで近寄ってきた騎士が自分の胸に触れた瞬間、王女は固まった。

（む……ね？）

事態を理解した王女の顔を占めたのは恥じらいでも嫌悪でもなく、恐怖の色。

「あ、……あ、あ」

「姫……」

騎士の顔など見られなかった。

「まさか……いや、しかし」

驚きに乗せた騎士の呟きに、手の平から嫌な汗が滲み出る。

「貴方は姫様ではありませんね？」

「な、何故そのようなことを？ いきなり無礼ではありませんか」
思わず声は強ばり、問うてきた騎士と目が合わせられない。

「しかし、貴方は男性ではないですか」

「——っ」

声にならない絶叫は王女——少年にとって死刑宣告に等しいもの。
そう、王女もまた少年だったのだから。

「なんて夢だ……」

思わずベッドから跳ね起きた少年は、額の汗を腕でぬぐった。漏れ出した声が年相応の少年らしい声でなく、鈴を転がすような可愛らしい声であったことが何ともミスマッチだったが、少年はこの声とのつきあいが長い。

「姫様、お言葉を謹んで下さい」

「わかつてる——人に聞かれたらよろしくないのでしょうか？」

「勿論です。事情は存じておりますが」

魔法で自分の声を奪われ、偽りの姫になることを承諾した少年は、監視役でもあるこの侍女に従わざるをえないのだ。

「では洗顔の用意をして参ります」

もっとも、そんな事情をこの侍女が口に出す筈もない。聞かれたら不都合が生じるから、ということ徹底しているのだろう。湯浴みではば毎日少年の裸を見ているが、この侍女は眉一つ動かさない（慣れたと言えば慣れたけど……）

異性として認識していないのか、仕事だと割り切って居るのかさえ掴ませない態度が少年を時々不安にさせる。

「いつまで続くの？」

こんな生活が、訊ねたところでこの侍女は答えてなぐれないだろう。

（本当の王女様が見つかるか、僕が偽物として役に立たなくなるまで、かな）

少年にも思いつく終わりはこの二つ。ただ、前者にしる後者にしろ生活の終わりは人生の終わりであるのかもしれない。

（生かしておく筈がないからなあ。漏れれば醜聞沙汰だし、体面を気にするなら念のために——）

結末が見えているのに偽りの姫君を演じ続けているのは、覚悟と
言うより諦めに近い。そもそも身代わりなどという話を持ちかけら
れた時点で拒否権はほぼなかったのだ。

「今日死ぬか明日死ぬかなら、明日を選ぶ」

単にそれだけのことであり、

「強制されてやらされるか報酬を積まれて引き受けるなら、後者を
選ぶ」

ということでもあった。

「わかりました、ただし——」

少年は断れば始末されると見て、条件付きで偽物役を引き受けた。
「しかるべき方が後見人に立ち、弟の家督相続を認めて下さいませ
よう」

少年の肉親はこの時もはや弟だけだったが、兄として出来ること
と言えば他になかったのだ。

（しかし、なあ）

だからこそ、昨日の出来事に少年は寿命が縮むかと思った。胸に
詰め物をいれた上、触感を誤魔化す魔法を宮廷魔導士にかけて貰っ
てはいるが、あそこでレイルという騎士に触れられていたらどうな
っていたことか。

「いやああっ」

「姫様！」

「姫様、どうかなさいましたか！」

「ご、ごめんなさい。ちよっと足を取られて転んでしまっただけ
です」

とつさに身をかがめて悲鳴を上げた後、駆けつけてきた他の護衛
騎士や侍女達に椅子から落ちてへたり込んだ状態で取り繕ったが、
少年は件の騎士の顔が見られなかった。

「姫様？」

「な、なんでもないのよ……そう」

気づかれたのではと恐ろしくて。騎士^{レイル}の事を伝えなかったのも、
発覚が怖くて触れなかっただけ。

（あの騎士はあれからどうしたんだろう？）

結果的に庇った事になったからお咎めは受けていない筈だが、少年にはやけに気にかかった。

（何でこんなに気になるんだろう？）

恋、などという選択肢を少年は当然のように除外する。もはや恋愛などすることもなくなっただろうが、少なくとも件の騎士は男性だと聞いている。少年に同性愛嗜好はない。

（偽物だつてばれそうになったから意識してるんだろうか……）

だとすれば、気づいているのか全く気づかなかったのか。もう一度あつて探りを入れてみるべきかもしれない。少年にとってそれは妥当な確認でもあり、同時に危険な冒険でもあった。

もちろん、先方^{かのきし}と会う機会があればだが。不幸な事故とはいえ、

無礼を働きかけ一歩間違えばお咎めを受けていたところである。

（思いつきり悲鳴をあげちゃったしなあ）

しかも、会ったなら会ったで気まずいことこの上ない。

「姫様、よろしいですか？」

だから、少年は意外に思ったのだ。

「えっ、あの方が？」

「はい」

二日もおかずかの騎士^{レイル}が登城してきたという事態に。

姫君の事情（後書き）

一話より短めですが、二話をお送りしました。

今回は姫君側のお話となっております。

さて、二人の行く末はどうなるのか。

尚、騎士の出番が回想のみなのでコメディ成分は次回に持ち越しの予定です。

読めぬ作為

「同僚しりあの騎士が言っいて居たんだが……」
「何を？」

おもむろに指を一本立てて、幼なじみの侍女アンナに主人レイラは言った。
「女は才としてしまえばこつ」

「却下！」

「拒絶は好意の裏返」

「妄想！　もしくは妄言！」

「男は行動で」

「レイル……レイラ様は女性ですっ！」

いや、言おうと思ったがとりつく島なし、だった。

そもそも、とりつく島などあるのだろうか。

「わかった、私が才とされよう」

「才とされるも何も既に血迷っていらっしやるではないですか！」

「そして、トドメの既成事実『赤ちゃんが出来』」

「どうやって作る気ですかアアアッ！」

ダメだ、早く何とかしなくては。もしくは、どうしてこうなった
だろうか。

（レイラ様、こんな方ではなかったのに……）

頭を抱えたアンナの脳裏によぎるのは幼い頃の主。

「アンナ、わたしがもしこうしゃくけをつぐことになったら……」
「え？」

幽閉された塔の中で椅子に座り、足をプラプラ揺らしていた主人
が突然口を開いた。

「アンナをめかけにしてやるな」

「レイルさま？」

「よく知らないが、おところはそうやっておんなをじぶんだけのもの

にするらしい。わたしはおとこのこでアンナがだれかのものになるのはいやだから……」

この時は兄が健在だったものの、主人は既にレイルレイラという男子として育てられていた。

「ありがとう、レイルさま」

二人とも幼く、アンナも妾というものがどういうものか理解していなかったから、自分を大事にしてくれているというところだけ理解して礼を言った。礼を言ったのだ。

（やっぱり、そうでもなかったかも……）

騎士団に所属し、会う機会も減っていた。だから最近主人の人となりを把握できていなかったのかもしれないし、身内として無意識にひいきしてしまっていたのかもしれない。

「紳士的で他の下品な騎士とは大違い」

「良いわよね、アンナは。あんな完璧な方がご主人様の上、幼なじみでもあって」

「あたしなんて旦那様を訪ねていらしたお客様にお尻触られてさ。
アンナのしゅじん

レイル様とまでは行かないけれどあいうスケベは論外」

つい最近までアンナの耳に入ってきたのは現状とはかけ離れた噂ばかりだった。

「ただいま、アンナ。元気にしていたか？」

「当家の馬車をお使い下さい、せっかくのドレスが濡れてしまいますよ」

「騎士というのは、ご婦人の為に濡れるのも仕事の一つ、お気になさることはありません」

事実、たまに戻ってくる主人は、下品な話どころか色恋めいた話すら口に上らせず、立ち振る舞いはアンナの目から見ても非の打ち所のない貴公子に見えたのだ。おそらく目の届かないところきしだんないでいる

いと毒されたと言うことだろうが、アンナからすれば主人にいないことを吹き込んだ騎士は一人残らず呪詛してやりたい気分だった。

「はあ……それで、どうするんですか？」

「どうするとは？」

「勿論、王女様です。さっき仰った様なことをなされるというなら、こちらにも考えがありますが」

「アンナ、あれは全て提案でお前に否定されているんだぞ。常識的に考えてダメといわれたことをするはずないだろうに」

「レイル様」

ほっと胸をなで下ろす反面、胸中で貴方ならやりかねないですと呟き、アンナはクローゼットに向き合う。主人が仕事に復帰すると言い出したのだ。

「まずは姫の好み調査からだ」

登城する主人の為にズボンを用意していたアンナは、二度目となるストーキング宣言で思わずズボンを落とし固まった。

「では、行ってくる」

我に返ったアンナが騎乗の人となったレイラを見送ったのは朝のこと。王族の近衛を勤める騎士の自宅だけあってレイラの館は王城がある首都の中にあつた。

「レイル様……」

もはや城についているであろう主は大丈夫だろうか。二重三重の意味での不安と、止めるべきだったのではと言う後悔にのしかかられながらアンナは窓の外を見る。先日の事件を詳細に記した文は追加で出した早馬にのてギルバーオレスト家へ向かっている筈。入れ違いになる可能性もあることから、ギルバーオレスト家の紋章がついた馬車や紋章の鞍をつけた馬がいれば接触を図るよう家宰が指示を出している。

（開き直ったレイラ様のことをお館様がご存じになれば……）

それはそれで一悶着有るだろう。ギルバーオレスト家の長とて状況を鑑みれば、不在を誤魔化すための身代わりを廃嫡したり処分することはできない。もっと良い偽物をでっち上げる事が出来るか、ほんものレイラの兄が見つかったのなら話は別だが、事が露見しないように、レイラのそふどれだけギルバーオレスト公爵が骨を折っているかを考えれば、レイラ主人は簡単に消してしまえる存在ではないのだ。

（けれど身代わりとしての価値のみが存在理由なのだから――）
暴走を阻止しようとするだろうし、度が過ぎて不利益を被ると判断すればそうも言っていられなくなる。

（そこまではレイラ様もわかつている筈）
もちろん、状況を打破する方法はある。

「貴方は先日……レイルと言いましたね。私に話とは？」

「はい、実は私は本当は女で、兄の身代わりとして影武者を強要されているのです。役目が終わるか不要と判断されれば殺されるでしょう」

「なっ」

突然の告白に王女は息を呑む。だが、我を忘れたのは僅かな間のみ。

「わかりました、その事実を明かしたと言うことは私に自分の身柄を保護して欲しいと言うことですね」

「その通りです」

冷静さを取り戻した王女に騎士レイラは頷いて――。

（王族に保護を求め、匿って貰う？ ひょっとして今朝までの態度は全て演技？）

アンナの主人らしからぬ行動ではあるが、背に腹は代えられないと判断したなら

「そんなことはない、ない筈」

アンナは知っているのだ。主人の人となり、誰よりも。

「けれど……」

否定した筋書きに他の誰かが思い至ることはじゅうぶん考えられる。

「レイル様……」

不穏な胸騒ぎを覚えながらアンナは小さくため息をついた。

読めぬ作為（後書き）

お待たせしましたか？

間が空いてしまいましたが、三話目です。

レイラの想いは偽りか、別の意図や作為あつてのことか？
何だか混沌として参りました。

どうかしてる

「先日の無礼、平にお許しを」

不可抗力であつたこともわかつており、王女には過剰に反応したという引け目がある。

「もう良いのです、頭をお上げ下さい」

「はっ」

謝罪の言葉を口にした騎士に面を上げさせると、王女を演じている少年は手を組み直す。

（……この人）

密かに息を呑んだのは、何気なく騎士の顔へ目をやった時だった。
「姫様？」

最初に顔を合わせたときにはそれほど興味がなく、新しい護衛の騎士が来たんだ程度にしか少年は思っていなかった。そもそも会ってからあまり時間も経たないうちに例のアクシデントふこうなじが起き、以後はまともに顔を見るどころではなかった。

（なんて綺麗なひとなんだろう）

女性と見まごうばかりの顔は、思わず見とれる同僚もいる——実際性別を偽った女性なのだが、少年は騎士団内ではほぼ誰もが知る騎士の存在をこの時初めて知ったのだ。

（つて、どうかしてる……男性に見とれるなんて）

女性であればまっとうな反応である、美貌の騎士に見とれ我に返って赤面するという反応も少年には受け入れがたいものだった。おそらく一目惚れで、初恋である。先日の一件で、正体がばれたかもしれないと変に意識したのが拙かったのかもしれない。

（そもそも、恋愛なんて諦めなきゃいけない立場じゃないか）

同性であることを棚に上げて、胸に抱いた想いが遂げられることは決してないのだから。

「な、なんでもありません。確か貴方は公爵家の嫡男でしたね？」

「はい」

「公爵家の嫡男ならば騎士団長や副騎士団長とは行かなくても大隊長ぐらいはつとまるのではありませんか？」

乱れた胸中を悟られまいと偽の王女は口を開き、誰もが口にする疑問を目の前の騎士に投げかけた。美貌の騎士でありながら王女に今まで認知されなかった理由の一つが階級の低さにある。

「自分より家格の高い部下を持つては上の騎士達がやりづらいのでは？」

とは、同僚の家格の高さを知った騎士の同僚が驚きつつも抱く疑問の一つなのだ。もっとも、影武者であることが露見しないよう目立つ行為を避ける為などと本当の理由を明かせる筈もなく。

「いえ、自分はまだ未熟者ですので」

と謙遜の形で誤魔化すのがレイラの常なのだ。

「未熟者ですので責任ある立場はまだとても」

「そうですね、つまらないことを聞きましたね」

「いえ、そんなことは……」

本当はそのまま会話を続けたかったが、少年には少年であまり関心を持たれたり親しくなるのは良くないという分別がある。

「では、席を外して頂けますか？ 少し一人になりたいのです」

もつと相手のことを知りたいと心のどこかで思っても自重するしかなかった。

「はい」

答えた騎士のトーンが若干下がっているように感じたのも、少年にとっては無意識の願望による錯覚でしかない。初対面の相手に好意を抱く事があるなら、それこそ相手を惹きつける何かがなくてはならない。先日はアクシデントのせいでほとんど接触しておらず、ほぼ初顔合わせとなるこの日も公爵家の嫡男が自分に惹かれてくれ

るような事をした覚えはない。

（王女という身分に惹かれたようにも見えなかったけどな）

公爵家の嫡男が惹かれそうな点があるとしたらまさにその一点のみの筈。

（けど、当の王女が偽物じゃ——結局身分なんて有って無いようなものだし）

少年の元々の身分は下級騎士の長男であり、王女を演じてこの場にいないれば相手にもされなかっただろう。何より性別という壁もある。

（そう、僕は男で——あの人も）

同性愛趣向が無かった少年にとって、突然現れた感情は青天の霹靂。

（禁欲的な生活を送ってるからだろうか、それとも女性を演じているから？）

本当にどうかしている。声には出さず心でもらす少年は、知らない。心惹かれた騎士との出会いが騎士にとっては初めてで無かったことなど。

（ん、気のせいかな視線を感じるような……監視かな？）

感じた視線が件の騎士によるものであったことも気づかない。

「姫様……」

騎士が抱く慕情も、戸口で騎士が囁くように呟いたことも。

「姫様、姫様」

知覚したのはしばらくして現れた侍女の声であり、内容は来客を告げるもの。

（ボロが出ないようにしないと）

女性というものは身分の上下にかかわらずおしゃべりというものが好きなものである。少年からすれば複数の異性と語らう時は気の休まる暇がなく、歌や楽器、舞踊といった習い事の方がまだマシだった。

「わかりました、お通しして。それからお茶の用意を——」

言づてに來た侍女に指示を出すと、偽王女は愁い^{よそいき}を帯びた顔を見せるための笑顔に切り替えた。生きるための孤独な戦場へ向かうのだ。

「まあ、あの方はギルバーオレスト家の……」

「あの、姫様…… よろしければあちらの騎士様にも同席して頂いては？」

「え、あ、皆様が望まれるのでしたら…… 誰か」

まさかゲストの令嬢達がかの騎士をおしゃべりに引っぱり込むとは予想だにしておらず、少年は慌てて侍女を呼ぶと客人の要望を伝えた。

（確かに、あの容姿と家柄ならね）

まして客人達は本物の女性なのだ、自分よりよっぽどお似合いだと少年は思う。

「姫様、お呼びと伺いましたが？」

「ええ、こちらの皆様が貴方と話がしたいと……」

侍女に連れられて入ってきた公爵家の嫡男へ少年は令嬢達を紹介しようとし。

「実は私も、姫様にお話があります」

「「え？」」

予想外の発言で室内にいた女性達の動きが止まる。

「私は——」

告白は突然に。打ち明けられた内容に、女性達は絶句するしかなかった。

どうかしてる（後書き）

と言うわけで、レイラがついに告白します。

「そして物語は大きく動き出す」とやりたいところですが、沈黙してるレイラのおじいさまや少年に王女の身代わりを強要している方々はどう動くのか。

そもそもあらずじにあつたアンナの恋とかその他諸々どうなるのか？
物語は続きます。

策謀の先には

このとき、レイラの暴走も告白も身代わりフエイクを立てた二人は完全に把握していなかった。だからこそ王と家督を息子に譲った老人は対処が遅れた。

「何があつた？」

何も知らぬ王は、執務室に飛び込んできた臣下へまず目線で問い。
「あの出来損ないめ、今度は何をしでかした！」

最初の一件だけは把握していた先のギルバーオレスト公爵は思い通りぬ動かぬ人形レイラに憤り、知らせを持つてきた家来の前で机をたたいて怒りをあらわにした。

「あやつの失態、王女に庇われ事なきを得たと言つが……いつまでも取り繕うわけにはいくまい」

「では、やはり分家から？」

「うむ、目星はつけて——」

「——様あ！ い、一大事です、若君が！」

老人の元に知らせが届いたのは、先の一件で人形レイラの放置に危険を感じたレイラの祖父が次の手を打とうとしたところであつたのだ。

「息子からレイラに家督を譲らせ、急病と偽りレイラを軟禁する。

軟禁中に男をあてがい子を産ませ、レイルが生ませた子と称して生まれた子をゆくゆくは当主に据える」

それはやはり情のない措置だが、公爵家の血は受け継いでおり家の安泰を考えるだけなら問題ない策だった。あてがう男の選定も済ませ、今から候補者の名を挙げて実行に移すのみだったというのに、老人の計画は白紙に戻さざるを得なくなった。

「おのれ、生かしておいてやった恩を仇で返す気か！」

だからこそ老人の怒りは収まらない。

「どういたしましょう？　まさかあのような大胆な行動出でるとは……」

「そもそも何を考えているやら」

「陛下や姫様はどうなさるおつもりなのでしょう？」

狼狽する者、唸る者、頭を抱える者。老人とて主である王の反応やただの身代わりとしか見ていなかったレイラがどう動くかは読めず、家臣達へは答えようがない。

「それよりもまずすべきことがあるう？」

だが、手をこまねいていては事態の悪化を招くと老人は知っていた。孫の思わぬ行動でアドバンテージを握られたが、こういう時のために老人はレイラに一人の侍女をつけていたのだ。

「幼いときから共にあった侍女なら情も残っていよう」

「なるほど、人質ですか」

「うむ、あの使用人を少々かわいがってやれば、あやつに出来ることは二つよ」

侍女の為に老人の忠実な人形に戻るか、血迷って侍女を助けに乗り込んでくるか。

「その為にわざわざ使用人をつけてやったのだ。侍女はまだあやつの屋敷に居ろう？」

「では直ちに」

「うむ」

まさか本家の人間が人質にするため自らの身柄を確保しに来るとは当の侍女も思っていないだろう。老人は確信していた、レイラへの人質を手中に収めることとなる事態の收拾を。

「同じような真似を今後しでかすとは思えぬが対策も練っておかねばならぬ」

主人の様子に胸騒ぎを覚えたアンナが理由をこじつけて既に城へ向かっていたなど、知るよしもなかったのだ。

「何、城へ向かったと？」

「はあ、レイル様に届け物を頼まれたそうで——」

結果、レイラの家の家宰からアンナが城に向かったことを聞いて私兵部隊を束ねていた男は驚き、引き連れてきた部下の半数を率いて後を追いつつも、報告のため一部を本家へ返し、念のため残りの部下をその場に待機させる。侍女の身柄の確保に向かった男は決して無能ではなかった。標的の侍女は武術の心得があるわけでもなく、人数を減らしても確実に手中に収めることを重視したのだ。

「ゆくぞ、なんとしても捕らえねばならぬ」

「はっ」

短く答えて男に従う兵は五名。任務が任務だけに人目を惹くわけにはいかず、ギルバーオレスト家の兵と悟られるわけにも行かない。少数の兵達は傭兵や商店の用心棒といった態に身を変え、人気のない裏道を城へと急いだ。

「いたぞ、あそこだ！」

城に向かったのは、自身が人質にされるかもしれないと悟つてのこと。男はアンナが城に向かってしている理由をそう判断し、騙して連れて行く事は無理と既に切り捨てていた。おんびん

「えっ」

「我々と来て——」

力づくで拉致しようと驚いた顔の侍女めがけて部下と共に駆け出し、硬直して佇むアンナの姿に任務の達成を確信したとき。

「よいしょ」

「もっ」

「っ」

「わわっ」

転がってきた大きな樽にぶつかり、後続の部下に衝突されて男は派手に転倒する。

「いやいや、こんな朝っぱらから人攫いとは感心しないなあ」

「おのれ……」

身を起こそうとする男達に殺意のこもった視線を向けられつつ、のんびりと黒髪をかき回したのは一人の騎士。

「ミゲル様……」

「アンナさん、レイルに会いに来たんですね？　ここは何とかするから先に用事を済ませてくるといい」

レイラと同じほぼ同じ団章を身につけた騎士は同僚の侍女が返事をするのも待たずに側にあった大樽を蹴り転がしていた。

「……参ったなあ、部下に仕事を押しつけて逃げてきたのに」

「大隊長！　探しましたよ」

頭をかく黒髪の騎士は、レイルの同僚ではない。同僚だったこともあるが、騒ぎを聞きつけて駆けつけてきた騎士が呼んだ通り、今では上司にあたる。

「やっぱり捕まったか」

正体不明の男六人と町中で立ち回りをやらかせば騒ぎにならない方がおかしい。

「って、何ですかこの男達は？！」

「いや、私にもわからないんだが、レイルのところの使用人に襲いかかるうとしてたのでね」

「何だかきな臭いですね」

「まったく、もつとも首をつつこんでしまったら大事になりそうだって私の勘が告げてるんだけど……っとうわっ！」

ミゲルは肩をすくめながら大樽に寄りかかると、自分の倒した男達のように盛大にひっくり返った。

「痛たた……この樽も空だったのか」

「……大隊長」

「そんな目で見ないでくれよ。あ、そうだ。この連中の移送手伝ってくれないか？」

ミゲルは誤魔化すように苦笑しつつ立ち上がると、気を失って転がっている男の一人に目をやった。

策謀の先には（後書き）

新キャラ登場です。

あまり増やすと管理とか大変なのですが、彼は外せないキャラなので。

さて、かろうじてアンナは窮地を脱しましたが、このままおじいさまが黙っているとは思えません。

この先どうなることやら。

そんな感じで続きます。

恋故に暴走

「まさかこんなに遅くなるとは——」

月の昇った夜空の下をレイラは早足で歩いていった。騎士団に所属していれば訓練や業務で帰りが遅くなることもあるのだが、帰路につくのがここまで遅くなることは希だった。

（どうしたものだろう）

更に問題なのがレイラの所在地。屋敷までの距離は直線距離なら短いのだが、他家の庭先を何力所か突っ切らねばならず、無断進入しているところを見つかったなら騒ぎになる。

「背に腹は代えられないか」

悩み、躊躇したものの最終的にレイラは時間を重視して垣根に空いた穴を子供のようにな身をかがめてぐり、明かりのついた館の方にも目を配りつつ足早に駆け抜ける——ただし、足音は立てずに。

（うん、やっぱりこの辺りにある家だけ有って敷地が広い）

公爵家の嫡男という肩書きのレイラの方が屋敷の庭は広いのだが、自身のことは棚に上げ、堀を乗り越えて路地に降り立つ。

「さあ、この調子であと三ヶ……ん？」

それは、呟きつつ目撃されていないかと左右に視線をやった時だった。

（あんなところに屋敷があったんだ……）

遠目に見えた建物からは明かりが漏れ、影になる位置に設けられたバルコニーで何かが動いたように見えた。

「泥棒なんてことはないだろうが……近所に住んでいて誰の館か知らないというのな」

今まで明かりの点っていたことも無かったことから、レイラはその館を空き家だと判断していたが違ったようなのだ。

（アンナには怒られるだろう、だとしても）

好奇心が勝って、レイラは明かりを目指して歩き始める。

「しかし、寂しいところだな。それに」

レイラが目指した建物は思ったより遠かった。まるで人目を避けるようひっそりと佇む館には塔が生えており、レイラが見た明かりは塔のバルコニーへ出るための入り口から漏れていたものらしい。

（他の部屋も無人ではなさそうだが……）

まるで住人の存在を隠すかの様にある窓は鎧戸に閉ざされ、ある窓は分厚いカーテンで塞がれていた。気がつけばレイラの見た明かりも消えていて、おそらく内か外から戸かカーテンを閉めたのだろう。

（住人を隠す？ いったい何のた）

訝しむレイラの思考を遮ったのは、女性の歌声だった。

「月の照らす、時にだけと夜空を仰ぐ。許された時、僅かな時に胸の想い秘めて」

（っ！）

月明かりに浮かび上がる華奢な少女が、バルコニーに立ち歌を口ずさむ。切なげな表情と悲しそうな瞳がレイラの目を奪い。

「あっ」

少女は小さく声を上げると自分の口を手で塞いだ。無意識に口ずさんでいた事に気がついたのだろう。

（歌うことを禁じられている？ それとも人目につくのを恐れているのだろうか？）

周囲を見回し、塔の中へと戻って行く少女の背を眺めながらレイラは疑問に思い。

（それよりも、どうしたって言うんだ……私は）

胸中に沸き上がる思いに困惑する。歌を口ずさんでいた少女の表情がまぶたの奥に焼き付いて消えず。

（何故——こんなにも惹きつけられるッ）

気づかぬ間にレイラは拳を強く握りしめ、立ちつくしていた。ま

だこの時、レイラは知らない。その少女が王女であることなど。

「そうか……私も籠の鳥だから」

ただ、理解したのは惹かれた理由。兄の身代わりとしてしか生きることを許されていないレイラ、存在を隠されなければいけない少女、近しい境遇にあったのだ。もちろん、性別を偽ってまで影武者を強要されているところまではレイラも気づいていない。

「あの女の笑顔ひとが見たいな」

それでも充分だった。自分には許されない女性らしい笑顔。笑う少女を見てみたいと、レイラは思ったのだ。

「私は貴女に恋しました」

初めての恋を。驚き止まった女性達の中、騎士レイラはただ王女だけを見て語る。

「貴女が王族であることも存じております。私が身の程をわきまえずこのようなことを語るのは無礼であり迷惑以外のなにものでもないでしょうが……」

知っていて頂きたかった、とレイラは言葉を続ける。まっすぐな思い故の暴走。

当人が言うところの『恋は全力突撃、当たって砕ける』を実行した形だが、アンナがこの場にいたらツツコんだことだろう。

「最初はストーキングするんじゃないかなかったですか！」と。

「何してんですかアツ！」

実際のところ、城につくなり告白の一件を知らされたアンナはやはりツツコんできた訳だが、当然だろう。

「いや、私の乙女心に歯止めがからなくなてな……つい」

「都合の良い時だけ乙女にならないで下さいッ！　どうするんですか、一応公爵家を継げば結ばれる可能性は0じゃありませんけれど」それもレイラが男であればの話だ。

「奇跡的に事が上手く運んだとしてもレイル様のこととはどこかで必ずバれますッ！　そのとき『実は女の子でした、ごめんねー？』じや済まないんですよ？」

額に手を当てつつアンナが睨むがレイルの笑みは揺るがない。

「大丈夫だ、夢は願いつけていれば必ずかな」

「かないませんよッ！」

「男の子になる」

「どうやってですかッ！」

「そこは気合いで」

「気合いでなれるぐらいならもつと前からなつて下さいよ！」
ツツコミの嵐だった。

「逆転の発想で、王女が男だったというのは」

「いい加減にして下さいッ、そんなわけないでしょうが！」

主人の戯言の群れをツツコミではじき散らしつつ憤るアンナだが、後日最後にはじき飛ばした戯言を思いだし愕然とすることになる。

「まあ、冗談はこのぐらいにするとしてだ」

ただし、レイラの方は自身が述べたとおり冗談のつもりだったらしいのだが。

「先日の無礼がなかったとしても、私は——私達の欺瞞に満ちた日常は破綻すると見ている」

「破綻？」

「嘘をつけば無理が出る、事はいつか露見して——露見する前に私が処分されるかもしれないが、ともかく終わりを迎えると思うんだ」こんな事は長く続くはずがない、とレイルことレイラは言う。

「だから、事を起こした」

「まさか、告白はおじいさまの裏をかいて攪乱するのが狙いだったと？」

騒ぎを起こし、自身を縛る者達を動揺させ何かをしようと言うのか。

「それもある。けどな、姫様を私が好きなのも、お前が大切なのも本当だ」

「まさか、姫様と私をかつさらって出奔でもするおつもりですか？」

思いついた恐ろしい考えを口にしつつアンナが主人の目を覗き込めば、レイラは微笑を浮かべつつ首を横に振る。

「可能ならそれでも良いが、難しいだろうな。それなりの勝算がなければ私も冒険はしない。ただね……」

人払いを頼み二人きりの部屋の中、レイラはソファから立ち上がった。

「前にお前と二人で馬車に乗って父上の館まで行ったことがあったな。馬車から見える景色の中に年頃の娘達が楽しそうにおしゃべりしている姿があつて」

レイラが目を閉じたのは情景を脳裏に描いているのだろう。

「あんな風に笑ってみたいと思つたことがあるんだ」

ギャグじゃないぞ、と付け加えたレイラは告白する。

「けど、私には無理みたいだから……アンナ、お前に笑っていて欲しい」

「レイラ様……」

「本当は姫君にも同じ笑顔を浮かべていて欲しいんだが、女の私ではな」

ポツリとこぼした主人の顔が寂しそうで、アンナも立ち上がる。

「そんなことはありませんよ、レイラ様の気持ちは——」

「ありがとう。けどな、アンナ……それ以上というお前で実験するぞ？」

「へ？」

「うん、女の私でも男の代わりが務まるかという実験だ。ミゲルには悪いが」

「なっ、何でそこでミゲル様が？」

一瞬絶句したアンナだが、誤魔化しようがないほど赤い顔が話題^{メル}の人物への気持ちを雄弁に語っている。

「それはそれとして」

「レ」

レイラはわかりやすく顔色を変えた侍女をからかうような目で見ていたが、アンナが抗議しようとした瞬間、表情は力のない笑みへと変わった。

「もし私の——本当の私のことを姫が知ったら、どんな顔をなさるかな？」

やはり驚かれるか、そして謀ったと憤慨するか、軽蔑するか。

「躊躇わないつもりで居たのに、怖いんだ」

アンナは何も言わず主人の後方に回り、小さく嘆息すると。

「アンナ？」

「この意気地なしがアアツ！」

振り上げた手でレイラの頭をはたき落とした。

恋故に暴走（後書き）

いやー、じつはこの第六話は三話予定だったタイトルが話しごと六話まで繰りあがったものだったりします。

レイラとアンナ側のみで書く予定だったからなんです、アンナさんツッコミすぎです。主人がアレだから仕方ないかもしれないですけどね。

そんなわけで続きます。

侍女と少年

「……参ったなあ」

呆然と立ちすくむアンナとの間、路上に転がって呻くごろつき達を挟み一人の少年が立っていた。頭をかきつつもう一方の手にぶら下げたままのそれは武器なのだろう。紐の先に鉄製の球を取り付けたような形状で、少年はあつという間に自分よりがたいの良さそうな男達を叩きのめして見せたのだ。

「あ、ありがとうございます……」

外に出られぬ主のために祭りの出店でお土産を買い込んだ帰りの道での出来事。少年が助けてくれなければ、十二になったばかりのアンナには逃げることも出来なかっただろう。

「いや、お構いなく。祭りで浮かれて酔っぱらうのも仕方ないだろうが無理強いは感心できないし……しかし、この状況をどうしたのか」

手を前に出して礼には及ばないと示した黒髪の少年は今も呻きながら転がるごろつき達に視線を落とすため息をついた。

「町中で喧嘩をしたなんてばれたら父に何を言われるやら」

どうやら自分の素行不良を詰られるのではというのが嘆息の理由であるらしい。

「あ、あの……」

「あ、ああ……そう言えば、大丈夫でしたか？ 怪我は？」

二度声をかけられてから普通なら真っ先に聞きそうなことを口にするほどの。

「だいじょうぶです。そ、それより……」

どこか抜けたところがあるというかズレたところがあるというか、少々変わった少年だったがアンナにとっては自分を助けてくれた英雄に違いない。

「おなまえをおしえていただけませんか？」

「ああ、僕はミゲル……ミゲっ」

頬を真っ赤にしつつなを訊ねれば、少年は微笑を浮かべながらアンナに近寄り――転がっていたごろつきに躓いてアンナの方へと倒れ込んだ。

「きやあっ」

ミゲルと名乗る少年を避けようとしたアンナは、石畳の凹凸に足を取られて尻餅をつき。

「痛たた……」

「あ、だいじょ」

ミゲルの声に我に振り返り固まった。少年の首がない、というか上半身がない。目に飛び込んできたのは変な形に盛り上がった自分のスカートで。

「きやあああああっ！」

スカートの中に頭をつっこまれたアンナの悲鳴が路地に響き渡る。これが、レイラの侍女であるアンナとやがてレイラの同僚を経て騎士団の大隊長に出世したミゲルとの最初の出会いだった。

「いや、本当に申し訳ない………なんと言ったらいいか」

自分のドジでとんでもないことをしてしまった少年はひたすら謝り倒し、恩人であることもありアンナはアンナでどう接すれば良いか困惑し。

「あ、いけない………もうもどらないと」

「っ、君！」

遠くでなる聖堂の鐘の音に我に返るとアンナは逃げ出してしまった。

「君はレイルの家の？」

「はい、侍女のアン」

二度目に顔を合わせたのは、アンナの主人が騎士団に入っ

らくした頃。

「「あーっ！」」

互いの顔を指して叫ぶという様は侍女にあるまじきと行いだったかもしれないが、それだけ驚いたと言うことでもある。

「アンナ？ ミゲル？」

アンナの主人だけがポツンと取り残されて二人の顔を交互に見ていたが、第三者に構っている余裕が二人にはなかった。

「どうか、結婚して欲しい」

「え？」

ミゲルはアンナに膝を折って求婚していたし、アンナの方はいきなりの求婚に固まっていたのだから。

「その、あ、あんなことをして責任をとらないのは男の風上にも置けないし……」

「ちよつと待てミゲル、お前アンナに一体何を」

「った、レイ……ぐつ、く首……ちよ、はな……」

「話すか、答える、三秒だけ待ってやる」

「けつ……こん」

主人がミゲルの襟首を掴んで詰め寄りガンガン壁に叩き付けている姿さえアンナには見えない。初めてあった時、最後の最後で不幸な事故があったものの危ないところを助けてくれた相手なのだ、包み隠さず言うならアンナはミゲルが好きだった。

（けど、私は……）

だが、アンナ自身の立場を考えればこの申し出に応じることは出来ない。アンナはレイラの秘密を知る者であり、主人同様身の振り方を自分では決められない立場にあったのだから。もちろん、だからといって即座に断ったのでは怪しまれる。事情を知らない者から見れば願ってもない話なのだ。

「少し、考えさせて頂いてもよろしいでしょうか？」

結局、アンナは保留という回答を選んだ。遅かれ早かれ『断れ』と命じられることを確信し、密かに胸を痛めながらも。

だが。

「諦めるな、ミゲルとのことはいつか私が何とかしてやる」

長年側にいたレイラにはアンナの胸の内などお見通しであつたらしい。

「私の幼なじみにとんでもないことをしてくれたのだ、ツケは必ず払わせてやる」

「レイル……様？」

クククと黒い笑みを浮かべる姿に、本当にお見通しだったのかと思わず疑問に思ってしまったアンナだったし。

「任せろ、宿舎で寝ているあいつの耳元で『責任とれ』と延々と囁き続けてやる」

「ッ……レイル様」

やけに楽しそうな笑顔でとんでもないことを言い出した主人にアンナは頭を抱えた。

「大丈夫だ、睡眠学習が終わったらちゃんとこの屋敷に戻ってくる」
そう言う問題ではない。ちなみに、レイラがわざわざ自宅に戻り宿舎に泊まらないのは、性別を偽っていることが理由である。人前で着替える訳にも身体を洗って汗を流すわけにも行かないのだから。
「本家の方は事故に見せかけてお前が死んだことにでもして——日陰者になるがミゲルに匿って貰えば問題ない」

「レ、レイル様！」

「まあ、これは最後の手段だ。だが、諦めるな。私はきっと何とかしてみせる」

コロコロと表情を変える幼なじみをおもしろそうに見たアンナの主人は笑顔で言ったのだ、諦めるなど。

「人にさんざん諦めるなって言ったのは、レイラ様でしょ！」

だから、アンナは抑えきれなかった。見ていられなかった、初めて見る主人の姿を――弱音を吐く姿など。

「だったら、主人が率先して行って、模範を見せて下さいッ！」

「アンナ……」

「らしくないじゃないですか……」

「わかったから、泣くな……」

頬に涙を伝わせる侍女の頭をレイラはぎゅっと抱きしめた。

侍女と少年（後書き）

そんなわけで今回は、アンナさんと想い人さんの出会い（回想シーン）をメインでお送りしました。

ミゲル大隊長はごらんの通り強いけどドジ、と言う設定です。

少年時に使っていたのは「流星すい」という武器で、大隊長になってからはフック付きロープのようなものを使っています。

戦闘シーン、出せるかわかりませんが。

では、次回に続きます。

私の紅茶返せ

「悪いけど、お茶を入れてくれるかな？」

部下に連行される形で担当部署に戻されたミゲルはやむなくまじめに仕事をこなし、ようやく休憩にありつけていた。机に突っ伏しつつ、ちらりと見えたメイド服に城勤めの侍女と判断して声をかけ、うめき声を上げながら身体を起こす。

「やれやれ、あれぐらいなら私の出る幕はないと思うんだがなあ」

さぼっていた分元を取らされた、ミゲル大隊長はぼやきながら天井を見上げ。

「おっと、ありがとう」

机にティーソーサーが置かれる音で我に返ると、こちらに背を向けた侍女へと礼を言った。

「へえ、私の好みをよく知ってたなあ」

見覚えのない侍女であったように思えたのに、お茶がほどよく冷めている。実は猫舌であるミゲルはカップを吹いてから口を付けたのだが、その必要もなかったらしい。

「うん、美味しい」

二口ほどすすってから本格的に飲もうとカップを傾け。

「まあ、嬉しいですね」

振り返った侍女の声と顔を知覚し、含んでいたお茶を盛大に吹き出した。良く見知った騎士が事もあろうに女装し、クネクネとしなを作っていたのだから。

「がふっ、げふっ、ごふっごふ」

「まあ、汚い」

レイルは顔をしかめて見せるが、咳き込むミゲルにいちいち反応している余裕はない。

「がふっ、レイ……何……レイル、何やってるんだ？」

「決まっているだろう？ 姫に独断で告白したからな。今の私はお

じいさまに捕らえられて蟄居を申しつけられてもおかしくない」

だから変装して隠れているということなのだろう。

「だが、女装はやりすぎじゃないか？ 顔と相まって本当に女性にしか見えないんだが」

見えないも何もレイルことレイラはもとも女性である。騎士団内に一人としてこの事実を知る者は居ないからこそミゲルもまた女装と思った訳なのだが。

「何を言う、こういう時こそこの顔の使い時だろう？ 酌婦や娼婦に化けて城下町に隠れても良かったんだが、あいにくとそっちの技術は会得していないからな」

ボロが出ては拙いから侍女にしたと暴露するレイラに、そう言う問題じゃないと言う意味合いの視線を送りつつミゲル大隊長は再び机へ突っ伏した。

「それで、まさかとは思うが」

「うん、美人の侍女を二人臨時で雇って欲しいんだ」

顔を上げておそろおそろ問えば、返ってきたのは予想通りの言葉。「勿論報酬は払うぞ、主に身体で」

「確認しておきたいんだが、それは侍女として働くことが報酬と言うことかな？」

「勿論だろう。それともミゲル大隊長にはそんな趣味がおりかしらあん？」

「ないよ」

頭に手を当てつつミゲルはきっぱりと否定した。もしレイラの本当の性別を知っていたとしてもおそらくそれは変わらなかっただろう。

「安心した、それならアンナを任せられる」

「レイル？」

「おじいさまは私を捕らえたり言いなりにする道具としてアンナを使う可能性があるんだ」

だから、自分とはとかくアンナだけは匿って欲しかったのだとレ

イラは語った。

「その約束を取り付けるため接触するにしても騎士の姿は拙いからな」

「レイル……君は」

「そう、この格好なら怪しまれず姫の元にもいけるだろうし、寝顔をこっそり拝謁したり、寝言を拝聴したり」

言いあぐねていた言葉を飲み込み、ミゲルは別の意味で言葉を失った。この場にアンナがいればツツコミの一つや二つは繰り出していただろうが、アンナを連れてきていてはレイラが侍女に扮して接触を図った意味がないのだから居る筈もない。

「そうやって冗談ではぐらかすところはいつも通りか」

「付き合いが長いとわかるか？」

「長いからこそ不思議なところもあるけどね、美人の侍女については引き受けてもいい」

「それはどうも」

「うん、それで雇用枠は二名欲しい、一名で良い？」

問いかけるミゲルに振り返るとレイラは人数分の指を立てた。

「そう言うわけで、落ち着き場所を決めてきたぞ」

「決めてきたぞ、じゃないですッ！」

どこかに去っていった主人がメイド服に身を包んで現れた時はアンナも驚倒したが、後に続いた報告には流石に黙っているわけには行かなかった。

「そもそもミゲル様にまで火の粉が降りかかってきたらどうするんですか！ あの方は無関係なんですよ？」

「その台詞を大隊長の前で言ってみるか？ おそらく傷つくと思うぞ、ミゲルもアンナが好きみたいだからな」

「なっ」

顔を真っ赤に染めた幼なじみを不意打ちの一言で黙らせてからレ

イラは口元綻ばせた。

「確かに申し訳なくも思うが、俺としては二人の仲を応援したいんだ。ミゲルに申し訳なく思うならそれこそ応えてやればいいだろう？」

デリカシーのかけらもないし乙女心とかそう言うものを根本から無視した無茶な理屈だが、匿ってくれた報酬として自分の身を差し出せばいいとレイラは言うのだ。

「ふざけないでくださいッ！」

「ふざけてなどいないさ。気後れして距離が縮められないことを考えてた。もし、自分の気持ちに素直になれないならそう言う理由で押しかけ女房をやればいい」

「レイラ様？」

「私も決めたんだ。もう恐れないし、この想いは貫くと。姫に受け入れてもらえなかったとしても気持ちだけは知って欲しいから」

再び言葉を失ったアンナの頬をレイラはそつと撫でると微笑んだ。優しい笑みだった、穏やかでいてどこか近寄りがたいものを感じさせるような。

「ありがとう、それとお幸せにだ」

幼なじみが我に返る間も与えずレイラは踵を返す。

「あ……そんな、レイラ様！」

後を追って部屋を飛び出したアンナが廊下へ顔を出しても主人の姿は既になかった。

私の紅茶返せ（後書き）

短めになってしまいました、八話目をお送りします。

ひよっとしたら後日加筆するかも知れませんが。

何だか捨て身っぽいレイラの向かう先は？

果たしてレイラの想いは届くのか？

続きます。

茶番劇へ続くもの

「陛下」

「良き知らせではなさそうだな」

ノックの後に執務室へと入ってきた男の顔を見て、陛下と呼ばれた男——国王は人づてに回ってきた書簡を受け取ると封を切った。

「むう」

「いかがなされました？」

主君の唸り声に横へ控えていた文官が顔を伺うが、国王は問いには答えず書簡を机の上に放る。

「危篤らしいわ、皇国の小せがれが」

「ま、まさか姫様の……」

「そうよ、報告には数日中に訃報を伝えて来るであろうとある。婚姻による外交も白紙に戻すよりあるまい」

驚く文官に比べ、醒めた様子で王は言葉を続け、投げ出された書簡を眺めながらポツリと呟く。

「しかし、娘が呼んだのやもな。わざわざ身代わりを立てまでしたというに……」

急死した娘の身代わりを急遽用意する必要に迫られた王の腹心は、二人の人物を用意した。一人は少年だったが、実の親が間近に見ても見間違えるほどに顔立ちの似た少年。もう一人は少女だが少年ほど王女には似て居らず、国民に生存をアピールするために少年を、実際の嫁入りには少女を使うことで危機をしのごうとしたのだ。

「だが、あの小せがれが居らねば、皇国も恐るるに足りぬ。現在の不戦協定で充分よ。問題はギルバーオレストの跡取りについてだ」

娘の身代わりにした少年へ求婚したと臣下から聞き、王が驚きに目を見張ったのは件の嫡男レイルがそれまで目立たぬ存在であったことに起因する。

「あれほどの大貴族の嫡男、実力などなくとも家の力でのし上がれ

ようものを何故一騎士に甘んじておつたかと思えば……」

周囲に警戒心を抱かせぬまま王女に近寄り、王女の心を射止める。もし王女を家督を継いで公爵となつたレイルが手に入れば、公爵家の権力は増大し王でも掣肘するのが難しいほどの存在になる。ならばプロポーズをはねつけるよう指示を出せば良いだけなのだが、それも拙い。

「盲点であつたな。皇国の小せがれが居なくなれば、王女を嫁むすめに出るような家柄の者はあの跡取りしかおらん」

「ですが、陛下」

「あの跡取りの申し出をはねつければ、起こりうる事態は二つ想像できるどちらかひとつ」

偽王女へ求婚の嵐が吹き荒れるか、最有力者すらはねつけられたと求婚者自体が絶えるか。絶えた場合も勘違いした愚か者が名乗り出てくるかもしれぬが、これは論外。

「下手な家や小国に嫁がせては国の沽券にかかわる——だけでなく秘密が露見し醜聞沙汰になることも考えられよう」

「では、陛下はかの求婚受けよと？」

「それを言つには決め手に欠けておる」

「は？」

おそろおそろ訊ねてくる臣下へ答えつつ、王は考えにふける。求婚に前後してギルバーオレスト家の手の者が暗躍していたらしいことを王は部下づてに聞いていた。タイミングを見る限り求婚は嫡男レイルの独断で、動いていた手の者は手綱の聞かなくなつた嫡男を止めるため動いていたのだとすればつじつまが合う。

「おそろくだが、あの求婚は嫡男の独断。しかもギルバーオレスト家の元当主と……いや前当主とあの嫡男は対立しておると余は見るとなれば嫡男を手中に収めることで、ことを有利に運べるのではないかと国王は思つたのだ。

「だがな」

問題があるとすれば、かの嫡男は王女の護衛を務め王女の顔立ち

をよく知っているという一点のみ。かといって流石に男の方の影武者を嫁入りさせるわけにはいかない。実は男の方で何の問題もなかったりするのだが、王もレイルが実は女性であると知らないのだから。

（男同士では子はなせまい）

公爵嫡男に少女の方の影武者をあてがうことも考えたが、偽物であると発覚する恐れがある。かといって王女をめとらせてから何の進展もなければ怪しまれる。

「少し外の風に当たるとしよう、供をせよ」

良案が見つからず、煮詰まった王が一つだけ決めたのは、気分転換をすることだった。椅子から立ち上がり幾人かの文官を連れて廊下に出れば、延びる廊下を一定間隔ごとに兵が立っている。

「ご苦労」

「はっ」

普段見張りの兵などに労いの言葉をかけることのない王だったが、良い案が浮かばなかったからだろ。他者との会話にさえ糸口を求めて一人の兵に声をかけた。

「何も変わったことはないか？」

「はっ、異常なしです」

「どのようなつまらぬ事でも良い、王者たるもの下々のことも知っておく必要があるのだ」

とは言ったものの、王は何も期待しておらず、気まぐれで声をかけたに過ぎない。

「つまらぬ事でもよいのでありますか？」

「よい」

「実は先刻、同僚が一人の侍女を見かけたそうなのですが……」

「ほう、侍女など城にはいくらでもいよう？　そのどこが変わったことなのだ？」

「一度見たら忘れられないほどの美人だったと言つのです。ですが、それほど美しい侍女なら人の噂に上らぬ筈がありません」

「美人の侍女か」

美人と聞いてもただ軽い興味を覚えただけだった。

「それその侍女はどこに居ったのだ？」

問うたのも気分転換ついでに侍女の顔を見てやろうと思った程度で深い意味はなかった。

「はっ、姫様のお部屋がある東側の一角と」

「そうか、もう良いぞ」

「はっ」

敬礼を返す兵士のことなど振り返りもせず、王は王女の部屋へ向かつて歩き出す。実際は違うが他者から見れば親子なのだ。しかもギルバーオレスト公爵家の嫡男に求婚された一件がある。そのことで出向いたとすればあまり不自然はない。強いて言うなら娘を呼びつけず自分から赴いたのが不自然かもしれないが、寄ったついでである。噂の侍女の事などさらにそのついででしかなかった。

「むっ」

「陛下？」

筈だった。

「思わぬ掘り出し物が足下に眠って居ったわ」

臣下の声など無視し、国王は笑みを浮かべて命じる。あの侍女を捕らえよと。

「陛下、お戯れを。兵のうわさ話など」

「捕らえよと言ったのだ。ただし傷つけてはならぬ」

未来の公爵を演じて貰う身体であり偽王女の子を産む身体なのだからなと心の中で王は続けながら、兵の噂にあったであろう侍女を見ている。それが侍女に扮した問題の男であるとは気づかずに。

茶番劇へ続くもの（後書き）

レイラさん大ピンチ？

と言うわけで第9話となります。

何だか微妙にややこしくめんどくさい事態になりました。
まさに茶番劇。

と言うわけで続きます。

囚われの令嬢？（前書き）

・おことわり

今話は話の展開上、今までと比べると若干性的なものが内容に含まれます。

苦手な方は回れ右をするか、飛ばして簡単な内容にまとめたあとがきをお読み下さい。

囚われの令嬢？

「……んんう」

ガンガンと殴りつけられているかのような頭痛に顔をしかめつつ、レイルことレイラが身を起こしたのは石造りの壁に囲まれた小さな一室だった。もらった声がかぐもったものになっていたのは布をかまされていたから。

（ご丁寧に手足もか）

身じろぎして確認してみれば縛られているらしく手も足も自由に動かない。直に見ることが出来れば縛られているかどうかはわかるのだが自由にならない身体の上には布がかぶせられており首から下が確認できなかったのだ。

（おじいさまの手の者とは手口が違うみたいだが――）

そもそも祖父に捕まったのであれば、もっと手荒い歓迎を受けている筈だとレイラは思う。王女への告白によって計画を台無しにされているのだ、家族の情愛といったものとは無縁な老人の心情を考えれば見せしめをかねて何かされていて不思議ではない。

（では居るはずもない侍女に不審を抱いた兵に――これもないな）

レイラは眠り薬を飲まされて拉致されたのだ。忍び込んだ密偵が何かだと思われていたのなら回りくどいことなどせず兵で囲んで捕らえてしまえば良いだけのことであるし、縛られているとはいえ密偵をわざわざベッド寝かせるとは考えづらい。

（まさか……）

消去法で誘拐された理由を推理していたレイラが次ぎに思い至ったのは、レイラの身体を目当てにしたという可能性。

（まあ、確かに顔も悪くないとは思いつし、胸も最近布で締め付けて誤魔化すのが難しくなってはきているが……）

今のレイラは一使用人の格好をしているのだ。寝かされていたべ

ツドは簡素だが背中を感じる弾力からしてもそれなりに上質の物とわかる。こんなベッドを備えた場内の一室を利用できるほどの身分なら侍女相手に拉致などせずとも権力を盾にして身体を差し出させることぐらい可能なはずであった。

（身分の低い者が私を連れ込んで部屋を無断で使っているとは思えないくしい……そもそも身体が目的なら）

目が覚めた時、鼻息を荒くした誘拐犯が目の前にいても良さそうなものである。もちろん、レイラとしてはそんな状況などご免被りたい訳だが。

（何にせよ、今の私はさしづめ『囚われの令嬢』か。何者に囚われているのか、何をされるのかわからない恐怖に襲われ、怯える令嬢を待ち受けていたのは——ッ！）

妙に冷静に同僚の騎士が休憩時間に読んでいた本の内容を思い出し、冷静な思考にヒビが入ったのは物語の先を思い出したからだ。ちなみに、その本——大人の男性向けである。

（まずい、まずいぞ……お嫁に貰ってもらえなくなってしまう！）
この場にアンナが居て主人の心が読めれば、誰がお嫁に貰うんですかとツツコンだことだろう。周りが男の同僚で、同僚達もレイラを男だと思い接していたせいで、レイラは耳年増であったりした。
「こんな時はきつと白馬の王子様が助けに来てくれる」

という逃避ではなく、いかがわしい本の内容を自分の未来と重ねて見てしまった辺り、やはり同僚達に毒されていたのだろう。

（くっ、落ち着け。落ち着いて状況を整理し対処法を考えるんだ）
身体を縛られたまま戦うのは少々厳しい、脱出できそうな場所は正面の扉だけだろうがおそらく鍵がかかっている上縛られた足ではまともに歩くことも出来ない。

（そもそも、下着一枚で城内を逃げたりすれば、それはそれで——）
恥ずかしい。普段男として暮らしているとはいえレイラにも乙女な部分はあるのだ。

「レイラ様を乙女にカテゴリ分けするのは流石に問題だと思います」

などと幼なじみに真顔で言われかねない行動を普段しているとしても。

（よし、わかった。ここは騎士らしく相手に一矢でも報いて散ろう。身体が目的なら近づいては来るだろうし頭突きの一撃でも）

何だか妙な方向に覚悟完了して、どこかすわった目をしているとしてもだ。勿論、アンナが聞いたらまた頭をひっぱたかれるような覚悟だったが。

「っていうかレイラ様、先ほどの今じゃないですかアアアッ！」

「す、すまないアンナ、冗談だ冗談。諦めはしない、最後まであがくから——」

びくりと身をすくませ、そう弁解しようとして口をついて出たのはもごもごというぐもった音だけ。

（いかな、状況が状況だけに精神的に追い込まれてみたいだ。すまない、アンナ）

胸中でここにはいない幼なじみに、詫びると頭を振ってから身を起こした。そして、そのままぴょんぴょんと跳んでレイラは部屋の入り口に近づく。

（私は、負けない）

まだ見ぬ誘拐犯を睨み付けるかのようにドアを睨み。

（来たか）

外から聞こえた足跡に身体をかめてバネを作る。縛られて歩くことは出来なくても跳ねることは出来るのだ。現れた人物が拘束をほどこしてくれる保証がない以上この不自由な状況で相手を倒すしかないだろうと判断してのことだった。

（来い）

鍵は外れ、がちやりと音を立ててドアノブが回る。

（今……だ？）

飛びかかる体勢を作ったレイラは飛びかかろうとした姿勢のまま驚きに目を見開き、硬直する。

（姫様？）

思いの丈を言葉にし、笑顔が見たいと思った王女とそっくりの顔が驚きに目を見張り、自分を見ていたのだから。

「んんああ！」

反射的に騎士の礼をとろうとするが、縛られ無理な体勢でそんなことをしようとすればどうなるかは、子供でもわかる。

「んんッ……ん！」

レイラはバランスを崩して床に倒れ強かに腰を打ち、痛みで我に返った。

（危なかった、よくよく考えればこれじゃ性別は誤魔化しようがな——）

皮肉にも身体を拘束されていたおかげで大ポ力をやらかさずに済んだことをレイラは悟り、苦笑しながら起きあがろうとするが上手くいかない。

（そうか、縛られて居るんだった）

状況を理解して顔を横に向ければ、そこには心配そうにこちらを見る王女の顔があつて。

「んん——！」

レイラの顔が熟れたリンゴよりも赤くなる。身をよじりつつ下着姿でもがく姿を他人に、しかも想い寄せる人見られていた訳なのだから。

（まで、このままもがいていたら恥に恥を重ねることに……だが、現状維持でも問題は解決しない。そもそも、私が告白した騎士だ^{あのレイラ}と姫は知らないのだから）

混乱したまま固まっていたレイラへ王女は歩み寄ると身体をかかめ。

「んん……ッ、ん？」

拘束された手を持ち上げられてパニックに陥りかけていたレイラは目を剥いた。腕の拘束を解こうとかの人物が持ち上げた手が胸に触れたのだ。レイラではなく王女だと思った人物の胸に。

（おと……こ？）

驚きに我を忘れたレイラは呆然としたまま少年の顔を見つめる。
思い人そっくりな顔をした少年を。

囚われの令嬢？（後書き）

あとがき

前書きで触れたとおり、内容をまとめておきます。

1：気がついたらレイラは一人下着姿で縛られていた。眠り薬を飲まされ拉致されたらしい

2：実は耳年増のレイラは現状に不安を抱いたり悲観したりしつつも、祖父の仕業でないことだけは確信し諦めず窮地を抜け出す決心をする

3：やがて外から物音がして誘拐犯が来たと思ったレイラは現れた人物に飛びかかろうとするもその姿に驚く。そこには思い人である王女そっくりの少年が居てレイラの拘束を解いてくれるのだった

だいたいそんな感じです。
そして続きます。

できすぎた偶然

「もう一度説明してもらえる？」

「姫様、お言葉を」

侍女は王女を演じる少年に言葉遣いの訂正を求めてきたが、少年からすればかばかしい限りだった。

「話の内容が漏れた時点で拙いだからわざわざ口調を取り繕う意味もないだろうに」

「常日頃から使っていないといざというときにボロがでもおかしくはありません」

「わかつてる……わかつています、それでも此度の思召しは」

侍女の言にも一理あることはわかつていた。だが、届けられた指示には反発を覚えざるを得なかったのだ。

「王女様の身代わりをする事になった時、もはや男としての自分はないものと考えておりました。それを今更何故なのです？」

「陛下のお考えを一侍女に過ぎぬ私が存じ上げよう筈もございません。『用意した娘との間に子をなせ』と、私はその言づてを預かったに過ぎないのでから」

激情を抑えるような少年の——魔法で少女のものに変えられた声に、侍女は淡々と答える。顔色一つ変えず、いつものように側に控えて。

「当然ですが、声を出すことはありません。口説くのであれば少々お手を煩わせますが筆談でコミュニケーションをとって頂きます」

王女の顔で身体は少年、ここまでならまだ誤魔化しうちはあると侍女は言う。

「『父親は王族であるものの庶子の上生まれつき声が出せず、それ故に幽閉されていた』というのが、その娘と居る時の姫様の肩書きです」

王女に似ているのは血の繋がりがあるから、存在が伏されていたのは声が出せない——しゃべることが出来ないことと庶子という出生の為であるとすれば辻褄が合うということなのだろう。

「つまり、私がその娘との間に作る子は私のように王族の影武者に仕立て上げられる子ということなのですか？」

そうまでして子を作れと言うのであれば、一生女性とは縁のない生活を強いられる事への温情ということは考えられない。そもそも少年の存在意義は王女に酷似した顔にだけあると言っても過言ではなかった。ただし、王族に顔立ちの似た女性との間に子を作らせ、今の自分のように偽物の王族としてでっち上げるといふならわかる。（わかりたいとも思わないけど……）

もともと少年にとつては王族など雲の上の人だった。政の上で己の身を犠牲にしなければならなかったり感情を切り捨てて動かなければならないのが国のトップにあるものだ。と偽王女になって初めて気づかされたのだが、少年は割り切れるほど大人でもなく若さ故の潔癖さも持ち合わせていたのだ。

（僕は自分から引き受けたんだ……他に道がないとはいえ。けど、相手の娘のことは何も聞いていない——！）

王族と偽られた自分に貞操を奪われ、あまつさえ子を産まされるという理不尽を見も知らぬ娘に味わわせなくてはならないのか。

（ただ、その女が王族に似てるというだけで）

この時少年は自分にあてがわれた娘のことを完全に誤解していた、王族の誰かに似た娘なのだろうと。

「存じませんと申し上げた筈です。私は一使用人に過ぎませんし、質問する権利も持ち合わせてはおりません」

実際に口にした問いかけは生まれた子についてのこのみで、件の娘が王族に似ているのではと言う推測を少年は口にしていない。少年の誤解に気づかなかつたのか、言う必要がないと判断したのか、侍女は向けられた問いにのみ知らぬと答え、結局少年は相手の娘と出会うまで勘違いしたままだったのだ。

（ええっ）

扉二つ先の部屋に娘が居ると聞かされて足を運んだ少年が目にしたのは、手足を縛られながらも身体をかがめ今にも飛びかかるようにする女性の姿だった。

（この顔……）

今にも飛びかかるようにする体勢にも驚きはしたが、一番の衝撃は女性の顔だった。

（王族じゃない、レイル……あの騎士にそっくりなんだ。なんで……）

「んんああ！」

（……っ、危ない！）

驚きに惚けた少年は布をかまされた女性の声で我に返るが、気づいた時には遅かった。

「んんッ」

足を縛られていたからか、バランスを崩した女性がよろめき転倒したのだ。

（いけない……）

くぐもった悲鳴を聞いてもかろうじて自制していたが、その後女性がかく様を見て少年は思わず部屋に踏み込んでいた。顔を見るだけと自身に言い訳し、この部屋に足を向けたことなど少年の頭からは既に飛んでいる。自分の立場も、目の前の女性がどういう対象であつたかも。

（せめて拘束を解かないと）

「んんー！」

起きあがろうとする女性の姿を見て少年は迷うことなく歩み寄り身体をかがめた。布をかまされたままの女性が何か声を上げていたが拘束を解かないことにはどうしようもない。

「んんんーッ、ん？」

手首の縛めを解こうと引き寄せた女性の手が自分の胸に触れたことも、なにやら女性が驚いていることも少年は構わなかった。

（手が自由になればあとは自分でやれるよね）

女性の身体に触れることには抵抗を感じたからこそ一つ解くだけですむ腕の縛めを解いたのだが。

（へ？）

女性は少年を見つめたまま呆然としていて。

（なん……っ！）

少年は少年で女性が下着姿であることにようやく気がつき、赤面する。二人そろって我を忘れ、息を吹き返すのは少々先のこととなる。

思い人と同じ顔の異性との邂逅。できすぎた偶然の出会いがもたらした衝撃に二人はまだ立ち直れずにいたのだから。

「ほほう、さつそくあの娘の元に向かったか。忠義者よな」

一方、少年が拉致した侍女の元へと向かったという報告を受け、

国王は満足げに口の端をつり上げていた。

「予定通り事が運べばもう暫し王女として飾っておいてやるもよろう」

もちろんいつまでも他者の目を欺けるとはこの王も思っていない。男にはやがて髭も生えてくるものであるし、体格や骨格によつては今後少年が男性らしい体つきに成長する可能性もあるのだ。「もともと病で逝ったのだ、療養ということで表舞台より消えても問題はなかるう」

いっそのこと子が生まれた事実だけ得てから少年と侍女共々始末してしまふという選択肢も王は考えたが、それでは公爵家に手綱を付けるといふ目論見を諦めることとなる。侍女を公爵に仕立てたまま少年だけ始末した場合、独身になった公爵という肩書きの女が一人残ってしまう。

（王女を妻にした男への後添えを申し出てくるような者は居らぬだろうが）

妻が居ても妾を持つ貴族は多い。偽王女が妾を持つことを許さな
いと言っていることにすれば少年が居る限り偽公爵にすり寄ってく
る女共を遮断できるが、偽王女という防壁をとり除いてしまえば、
高位の貴族であるが故に「自分を妾に」と言い出す女が居てもおか
しくはないのだ。

「つがいでなければ危ういか、厄介な事よ」

結局二人セットでなければ機能せず、王としては少年の手腕に期
待するしかなかった。

「せいぜい励むがよい。あの娘の心を虜に出来れば公爵代行の話も
つけやすくなるう」

王の権力で押しつけるよりは自分から進んで引き受けさせるべき。
そう考え、王は捕らえた侍女との対面を伸ばし、先を少年に譲った。
上手くいかなければ権力を盾に強制するだけなのだから、王からし
てみればどっちに転んでもいい訳だった。

まさか、少年がただ顔を見るだけのために娘の元へ足を運んだな
どとは知るよしもない。

こうして、誤解とすれ違いによって茶番はもう暫し続くこととな
る。

できすぎた偶然（後書き）

お待たせしました。

いよいよ本来の性別で対面することとなった『わけあり姫』と『偽りの騎士』。

王の思惑通り二人はくつつくのか、それとも……

そんな感じで続きます！

妄想と幻想

（さて、状況を整理してみよう）

我に返ったレイラは口や足の拘束を解きながら胸中で呟いた。

（何故だかわからないが私は捕らわれ、気がついたらこの部屋にいた）

そして意識を取り戻してたいして時間の経たぬうちにやってきた少年に助けられた。

（いや、拘束の一部を解いて貰ったという意味では確かに助けて貰ったが、私はここから抜け出せたわけではないし……）

そもそもレイラは自分の捕まった理由さえ知らないのだ。

（この少年は聞けば答えてくれるだろうか？）

レイラが下着しか身につけていなかったことに今更ながら気づいた少年は、顔を赤くしたまま俯いてしまっている。

（だが、そんなことはどうでもいい。一番重要なのはこの少年にどう対応するかということだろう）

身分に由来する二人の立場と性別、二つの壁が立ちはだかる先に居るレイラの想い寄せる王女と少年はまさに『うり二つ』なのだ。

少なくとも壁の一つ取り払われたところにいる少年は、王女を高嶺の花だとするとそれより手折りやすい花に見えても仕方がないことだろう。

「こっちの少年なら性別問題もクリア、本物にはとても手が出ないから」

などと王女の代理として少年を求めるのはある意味不誠実きわまりないだろうが。

（どうする、私？ やるか？ お嫁に行けなくなったので責任とって貰うか？ むしろこちらから押し倒すか？）

などとレイラの脳内に妥協派が存在するのも事実であった。

「何を言っている、私がお慕い申し上げているのは姫であってあの少年ではない！　そもそもどうしてそこまで話が飛躍する？」

「思い立ったが吉日、『恋はいつでも全力突撃、当たって砕ける、波状攻撃！』だろうに」

「だからこそ、姫に告白したのだろう。ここまできてあの少年に乗り換えようなど笑止千万」

「よし、わかった。ここは公平に姫と私をこの少年に貰って貰おう」「破廉恥だぞ、貴様！　それでも私か！」

レイラの脳内会議をそのまま引つ張り出してくるとしたらこのようなものとなる。何とか大混乱だが、実はレイラも少年に下着姿を見られたことを引きずって若干てんばって居たのだ。

「そうは言うがな、良いか私よ。あの少年と私であれば私が女サイドのデートが可能なのだぞ？」

脳内レイラの一人が口にしたのはまさに悪魔のささやき。それは耳にした者に甘い夢を見せて惑わす――。

「すまない、待たせたか？」

「いいや、今来たところだよ」

生まれてこの方着たことの無かった年頃の娘が纏うような衣服に身を包み、待ち合わせ場所に決めていた彫像のもとまでようやく辿り着いたレイラに少年は優しく微笑む。

「きよ、今日の私はお忍びで乙女だからな、思う存分エスコートして貰いたい」

「もちろん。それじゃあ、今日は僕がレイラさん……レイラの騎士だね」

口調が乙女じゃないとか、言葉の使い方がおかしいなどと幼なじみの侍女のようなツッコミはせず、ただ笑んで。

「うん、ふつつか者だが、よろしく頼……ッ！」

頷こうとしたレイラは手の甲に唇を落とされて言葉を失う。顔は

一気に紅潮し、何かを探すように泳ぐ目に映るのは街角の風景。

「どうかしましたか、僕の姫様」

（落ち着け、落ち着け私！）

少しだけ悪戯っぽい目で顔を覗き込まれたレイラは、ものすごい勢いで頭を振りながら自分を抱きしめるようにして何かに耐える。鳥肌が立ったとか不快だとかそう言うわけではない。レイラの中を駆けめぐる感情はむしろ間逆にあるものだった。

「あー、いいか？　僕の姫様と言うことは、私の言うことは私がして欲しいと思えば……」

「もちろん何だつてするよ？」

「っ、ぐあっ」

冷静を装って何気なく向けた問いにレイラは思わず仰け反り。

（何でも、だと？　では手を繋いで歩くとか食べ物を食べさせ会うとか人前でイチヤイチヤは当然、あんなことやそんなことまでもおっ！）

明らかにレイラは重症だった。そもそもレイラは耳年増であるのだ、しかも騎士団の同僚にかなり毒されている。

「そのどこが乙女なんですかあああっ！」

とアンナが聞いたらおそらく絶叫するであろうとんでもないことを脳内に浮かべながら、目はキラキラと言うよりギラギラさせて肉食獣が獲物に向けるような視線を少年にやって。

「その言葉に嘘偽りはないな？」

「勿論」

まぶしいほどの笑顔と共に少年が返した答にレイラの心は決まっ
て――。

「はっ！」

我に返るとレイラは下着姿のまま少年の前に座り込んでいた。

（なんて恐ろしい誘惑だ。一瞬妥協しかけた）

顔には出さず肉食系の夢に戦慄しながら頭を振ったのは、脳内の何かを頭の外に放り出したかったからだろう。

もちろん、中途半端なタイミングで復活した少年が、かわいそうによつぽど怖い想像をしたんだなとレイラの反応を別方向に誤解していたことなど知るよしもない。

（うん、どうしたんだろう？）

そして、レイラの妄想と比べればかわいいものといえる程度の『もしも』を一瞬だけ想像したことも。互いが互いに相手が本当の思っている人であることに気づかず二人は悩み。

（そう言えば、この少年はさっきから一言も話していないな）

人の想いなど歯牙にもかかけず運命の車は回る。レイラが全貌では無いにしても自身のさらわれた理由を知るのは、この数分後のこと。「筆談？ 喋れない？」

羊皮紙になにやら書き始めた少年はレイラの問いに頷きを返した。

妄想と幻想（後書き）

お待たせしました、今回は短めです。

レイラと少年の恋の行方もいいよいよ大詰め？

そういうわけで続きます。

選択すべき道は

「身代わり……公爵令息の？」

自分自身のさらわれた理由を知った瞬間、レイラは無意識に眉を寄せていた。

（正体がばれているわけではないのだろうが、何とも微妙な状況だな）

そうでなければ、偽物を立てるためにわざわざ本物は誘拐しない。もちろん、本物がここにおいて不在なのだから下手すればそこから発覚する恐れもあるのだけれど。

（ばれることがなければ、元の場所に収まった上女の幸せゲットで子供ももてる……と）

変わるところがあるとすれば、祖父の指示に従う形だったのが少年の黒幕に従う形になることと。

（最悪裏で平民扱いされることぐらいだな）

存在を伏せられていたとはいえ、レイラは真正銘の公爵令嬢だったのだ。だが、侍女という偽りの身分である今のレイラは正体を明かせない。身分保障してもらえる人物も居ないのだから平民出身で両親は既に居ないと言うことにでもしておくしかない。

（囚われた時点で身辺調査も始まっているだろうし）

下手に貴族出身と嘘をつけばすぐばれる。存在しないはずの侍女であると言う点については、登城した主人についてきたと言うことにしておけばある程度誤魔化せる。これは、何代か前の王に仕えた貴族が情婦を職場へ連れ込む為に使った手段だそうで、好色な貴族の中には今もかの貴族に倣って領民の娘を場内に連れ込む者が居るという。

「女の密偵が紛れ込んだら如何する！」

と、当時城の警備を任されていた近衛騎士団の長が激怒し、件の

貴族は処罰されたのだが、こういう事にかかる一部の男の情熱には不可能も可能になってしまう力があるらしい。ある日、宮廷魔術師とコネのあった貴族が打開策を編み出したのだ。それは、幻術魔法を用いた催眠暗示による面接である。

（許可証を身につけていて助かった）

面接で王家及び国に害意がないと判明した女性にのみ登城許可証が発行され、貴族に従い登城する侍女や小間使い、そして情婦などは入場の際にこの許可証を見せる決まりとなっている。ちなみにこの時レイラが持っていた許可証は、目的こそ当初と違うモノのこんな事もあるつかとレイラ自身が前もって用意していたモノであったりする。

（足がつきにくいとはいえ少々嫌な肩書きだけだな）

許可証は特殊な染料で彩色された手のひらに収まるサイズの板で色と彫り込まれた文字によって所有者の肩書きを表したものだ。レイラの持つ許可証の肩書きは、情婦見習い。年齢を考えると見習いというのは何かいたたまれないモノがあるが、レイラは情婦になれないのだ。

「姫の情婦にならいつでもなるけどな」

「なるけどな、じゃなああいつ！」

そもそも王女の情婦というものが既にいろいろおかしい。同性愛嗜好の王女とて世界や歴史を探せばいるかも知れないとしても。

（あんなに強くツツコミを入れなくてもいいのに。……それはそれとして、今考えるべきはそこじゃない）

アンナと許可証を手に関わしたやりとりの一部を思い出し口元を少しでも綻ばせたレイラは思考を切り替える。選べる道はいくつもあった。

（どれを選ぶか、か）

一つめは少年の後ろにいる黒幕からのモノであろう要求に従う道（姫そっくりの夫との夫婦生活、そしてその先に待つ家族としての生活は魅力的だが、この少年はどうなのだろう？）

一喜一憂し大混乱し失念していたが、レイラは少年の気持ちを聞いていない。

（いくら心惹かれる容姿でも組み敷いて無理強いするなんて騎士のすることではないしな）

ついでに言うなら乙女のすることでもない。そもそも女性の発想ではない気もするが、レイラはつくづく騎士団の面々に毒されていたらしい。

（望まぬ契りならいつそのことこの少年を連れて逃げ出すのも一つの手だが）

逃げても行くとこがない。かつ、王城で逃走劇などやらかそうモノなら少年の後ろにいる黒幕は黙っていないだろう。持ちかけられた話を加味すれば黒幕が王か王族あたりであろう事はレイラにもわかる。つまり、事を起こせばレイラが想いを遂げられる可能性が限りなく0に近くなるのだ。

（だから、考えたもう一つの手。要求を呑んだふりをして——この少年を王座につける）

つまりは、王位篡奪計画。

（上手くやれば、自分の居場所を作ることが出来る）

もつとも、一番無謀な道であり。

（ただ、黒幕を信用させるためには私も払わなければならない……代償を）

少年を通じて知った要求の幾つかに応じなければいけないと言うことでもある。

（ここでこの少年に身体をゆだねるのは裏切りだろうな）

自らに対しても。また、慕っていることを打ち明けた王女に対しても。

（決めなければいけない。我が身と想いを投げ出せばその先に姫の幸せがあるかも知れないし……）

そもそも女の自分で姫を大切に出来るのか。

（何でここで迷うんだ、私。性別の壁が聳えていたことなんて既に

織り込み済みだろう？)

罨、だった。思いを寄せる人に似た容姿の異性、妥協することですに入るモノ。それはレイラを甘く酔わせ墮とす罨。同性より異性を選ぶのが性別のある生き物としては正しいし、その異性は簡単に手の届く場所にいる。

(どうする？ いっそのことこの少年に委ねるか？ そう言う行為は双方の同意が必要なことだし)

それは詭弁でただの責任逃れでしかないとレイラは知っていた。迷った弱さを、想いを違えた弱さを少年のせいにするという卑怯な振る舞い。

(いや、待てよ……私が実は本物だったと明かしてこの少年に協力して貰うというのは――)

レイラは本物の身代わりに仕立てられる為さらわれたはず。だとすれば、事情を話すことで他の道もとれるのではないか。

(いや、ないな。本物が既に身代わりだったことすら察知して居なかったのに)

その身代わりは事もあるうに同性の王女に恋慕の想いを打ち明けていたと言うことになるのだ。事実ではあるのだが、打ち明けても信じてはもらえないだろう。実は公爵令息が偽物というだけでかなり希少な存在であるのに、同性に恋愛感情を抱く者となれば更に少数派である。たまたまさらった侍女がそんな存在だったなど、ゆで卵からひよこが生まれた言われるよりもよほど嘘くさい。

(ええい、どうする私。悩んでいる時間もそれほど無いのだぞ。私の下着姿にムラムラして少年が襲いかかってきたらどうする？ まだ心の準備が……じゃない、抵抗できるのか、私は？)

何せ顔が思い人に瓜二つである。心情的に抗えるかというレイラは絶対の自信を持って己の問いかけに答えることが出来なかったのだ。

(もういっそのこと私から襲いかかるか？ この際とことん墮ちても姫とアンナとこの少年とあとついでにミゲルの幸せさえ確保で

きればそれで良いという方針で)

悩めば迷いが生じ、迷い停滞した思考には危険な考えが頭をもたげる。追い込まれると捨て鉢になる癖がレイラにはあるのかもしれない。

(アンナ、どうしてるかな)

だが、悪い癖が出たレイラの尻を蹴飛ばしてくれる幼なじみは今側にいない。

(うーん)

悩みに悩んだあげく。

(よし、押し倒そう)

レイラの出した結論がそれだった。

選択すべき道は（後書き）

お待たせしました。

お話はいよいよクライマックスへ？

ちなみに早くて後1〜2話で完結の予定です。
では、続きます。

誰と戦って居るんだ

「ふつつか者ですが、いただきますっ！」

色気のかけらもないむちゃくちゃな挨拶とともにレイラが少年に襲いかかったのは、勿論考えがあつてのことだった。少年の身体が目当てだったとかそう言うことではない。

（嫌がつてくれればそれはそれ、乗り気でないことがわかったただけでも儲けものだ）

知リたかつたのは少年の意志、欲しかつたのは――。

「そのまま聞いて欲しい」

他者に察されることなく少年と会話出来る状況。抱きつくほど密着して耳元で囁けば、ごく僅かな声でもやりとりが出来る。監視役が居る可能性を考慮すれば、さらわれた女性が自分から襲いかかるのは不自然な気もするが、レイラは一時的にそのことを考えないことにした。

（いや、しかし……何というか）

正確にはそんな余裕が無かつたというのが正しいのかも知れない。騎士として訓練の一環で異性と取っ組み合いの戦いは経験しているものの、流石に女物の下着姿で殿方に覆い被さつた経験はレイラにも無いのだ。計算尽くで行動に移してみたが、遅れてやって来た羞恥心が形容しがたい感情へとレイラを追い込んで行く。

（今はドキドキしている場合ではない、落ち着け私。今は少年にこちらの目的を……ッ！）

耳年増と言つても実際の経験値はゼロに等しい。我に返つた瞬間押し倒していた少年と目があつたレイラは思わず目を背けた。

（いかん、いかんぞ。あれは何というか無理矢理襲われた人の目だ。早く弁明しなくては）

胸中の動揺と羞恥心から挙動不審になつたレイラの一挙一足に、

腕の中で少年がビクツと反応し身体の下で縮こまられる度にレイラはいたたまれなくなる。もっとも、ろくに事情説明も出来ずいきなり押し倒されたのでは少年の反応も無理もないものなのかも知れないのだから。

（そもそも私と子供を作れと言うのも無理矢理命じられているのかも知れないし……って、そうじゃない。こういう時はまず相手を安心させて）

相当てんばって居たのだろう。

「い、痛くしないから」

再び少年の耳元に口を寄せたレイラの口から漏れたのは、そんな一言だった。

（痛くしないからって何だ！ 何を言っている私！ そもそもどちらかというと痛いのは今の私じゃないか！）

大混乱に陥るレイラの下では、少年が完全に固まってしまっているが周囲の状況に気を配るような余裕は今のレイラにはない。

（とにかく落ち着け、作戦を練り直すんだ）

激しく頭を振って立て直しを図りたいところだが、人の目があれば不自然きわまりないことぐらひは理解できていて。

（そもそも監視の目はあるのか？ だとしたら一部始終を見物するつもりなのか——つまり、変態だな？）

ゆっくりと顔を上げたレイラの視線が何かを探すように動き回り。

「は？」

「見つけた」

目的の存在を見つけたとたんレイラの胸中で自身の顔が獲物を見つけた獅子の笑みへと変わる。

「何を見ているかこの変態めええっ！」

と咆吼しつつ怒りの一撃をぶちかましたレイラではあったが、まだ分別は残っていた。おもむろに立ち上がると縛られていた時毛布代わりに身体へかけてあった布を身体に巻くと全力で駆けだした。
「きゃああああっ！」

乙女らしき恥じらいの悲鳴と共に放たれたのは助走をつけた跳び蹴り。結局は八つ当たるのだが、恥じらいにくるむ辺りがレイラの分別であつた。

「かふっ」

「え？」

ただ、蹴り飛ばした相手が侍女であつたのはレイラにとつても予想外だつた。少年からすれば見慣れた相手であるし、レイラも王女の側に控えていたことから面識はあるのだが、その侍女が何故このような場所にいるのかわからない。

「あなたは姫様お付きの……」

「……っ！」

漏れ出たレイラの言葉に、身を起こそうとしていた侍女が息を呑む。

「せえいつ！」

「つと！」

続いて起こした侍女の行動にレイラがとっさに反応できたのは、騎士としての修練の賜だつた。

「はああっ！」

「ちょ」

どこかに隠し持っていたらしき刃物を使った斬撃に続いて崩れた体制から放つ後ろ蹴り。護身術にしてはやたら本格的な動きに目を見張りつつもレイラは仰け反ることで侍女の足をかわす。

「二度もかわすとは、ただ者ではありませんね」

「え、い、いや……私はただの侍女」

先ほどの動揺から立ち直つたのか、表情を消して淡々と問う侍女へレイラは首を横に振ってみせるが、言つた当人も無理があることはわかつていた。体術の心得が侍女に必須の能力だというならいざ知らず、あそこまで不意をついた攻撃を回避することなど普通の侍女には出来ない。

「それならそれで良いです。ただし、貴女は危険すぎますので排除

します」

（危険？ まさか、ひょっとして……）

レイラの回答など本当にどちらでも良かったかのように意に介さず、床を蹴った侍女は前方の床に両手について腕の力で跳躍する。

「わかった、この方は貴女にお譲りする！」

「もう止めて、こんなこと！」

レイラと少年が同時に叫んだのはこの直後のこと。

「「え？」「」」

三人の声が一瞬ハモリ。

「きゃああっ」

「その声は……」

着地しそこねた侍女が転倒して悲鳴を上げる中、聞き覚えのある声にレイラは惚けていた。

「姫様」

「はい」

思わず口をついて出た声に少年は頷く、少女のような声で。それはレイラがかって見た翳りある王女の顔そのものだった。

誰と戦って居るんだ（後書き）

ついにばれてしまいました、少年の秘密。

そして、入れるつもりもなかったのに気が付いたら書いていた王女お付きの侍女とレイラの格闘戦。

果たして少年とレイラは結ばれることができるのか。

では、続きます。

真実と混沌

「それで、僕は弟の身の安全と幸せを条件に身代わりを引き受けたんだよ」

口調は少年のものながら声は鈴を転がしたような少女の声で少年はレイラに事情を語った。

「その侍女も似たような理由。打ち明けてくれたのはつい最近だけど」

自身の存在が元で秘密が露見したならそれは自分の落ち度。

「失点で人質の身が危なくなると思ってたんだろうね。彼女が取り乱してるところを見たのは、事情を打ち明けてくれた時を除けばさっきが初めてだし」

「でも、よろしいのですか、そんなことまで打ち明けて？」

先ほど攻撃を仕掛けてきた侍女からしてみれば、混乱していたとはいえレイラを始末してでも隠そうとした秘密の筈なのだ。軽々しく打ち明けて良いものの筈がない。

「あの状況で貴女が殺されれば、確保した有用な人物を勝手に殺害したとして彼女は処罰されていた。貴女が勝って逃げられたとしても彼女は罰を受ける」

「なるほど」

どちらに転んでも侍女は処罰されると言うなら。

「私が黙っている以外にあの侍女を救う方法は無いと考えたわけですね」

「そう。もちろんお願いできた義理ではないよね」

相手は保身の為レイラを殺そうとしたのだ。普通に考えれば誰でも少年と同じ結論に至るだろう。

（だいたい状況は把握したな。あの時、塔のバルコニーで見た表情の理由もわかった）

ただ、レイラはもう侍女の事など気にしていなかった。想定外の事実には衝撃を受けてかえって冷静になった思考は別の問題に直面していたのだ。

（しかし、ここは私の方の事情も打ち明けるべきか）

侍女の出現と少年自身の暴露からなし崩しに王女の秘密を知ってしまったレイラだが、レイラの秘密を目の前の偽王女と侍女は知らない。

（隠しているのはフェアではないが、そもそも姫——この少年は私のことをどう思っていたのだろう）

レイラは以前、騎士のレイルとして目の前の少年に告白している。その時は返答を保留されたのだが、正体が少年だったのでは無理もない。

（同性でもOKと血迷ってくれるほど私に好意を抱いてくれていたなら脈があるかわかったんだがな）

当時は周囲に人の目があった。血迷われたら相当な醜聞沙汰であり大騒ぎに発展していた筈なのだが、幸か不幸かレイラの思考にツッコむ幼なじみはここに居らず、レイラも流石に心の声を吐露するようなことはない。

（いや、待て。それで血迷ってるとしたら、当時の私も血迷っていたことになるじゃないか）

つまり、レイラが秘密を明かすと言うことは同性でも構わず告白した女であることを明かすことでもあるのだ。

（いや、後悔はない。後悔はないんだが……ドン引きされはしないだろうか？ いや、引かれるだけじゃなくて同性が好きな人と認識されたら……）

想い人との障壁が無くなり距離が縮まったと思った瞬間、レイラの元にやってきたのは恐怖という名の感情だった。

（失敗したか、失敗したのか？ あそこで獣になっておくべきだったのか？ 教えてくれアンナ！）

取り乱しつつ救いを求めた相手は今ここには居ない。居たとした

ら、まず獣がどうのという件に盛大にツッコミを入れたことだろう。
（もういつそのこと黙りを決め込んで、黒幕の思惑に乗ってみるか？
そうすれば少年との夫婦生活ゲットで目的達成と言うことに……
いやいや、安直な方向に流れてはダメだろ、そもそも真の幸せは……）

「あのー」

「はっ」

レイラはどれほど己と戦っていたのか。我に返れば少年とその侍女がレイラの顔をおすおすと覗き込んでいて。

「うー、あー」

形容しがたい気持ちで悶え転がりなくなりながらも奇声を発し自らの頭を鷲掴みにして耐えたレイラはかつて騎士としてそうしたように少年の前に片膝をついた。

「私は」

王女に想いを告白した騎士は、かの時と寸分違わぬ姿勢で言葉を続ける、恋をしていましたと――。

「こ、こ……」

言う筈であつたのに緊張と恥ずかしさといたたまれない気持ちがレイラの告白を阻害する。

「こ、子供は多い方が良いです」

そして、よりによって口をついて出たのは本来の意図とはかけ離れたものだった。

（ま、待て！ 何を言つて）

「……そ、それは黙っていてくれると言うか僕たちに付き合ってくれると受け取って良いんだよね？」

「あ、はい……」

リメイク

言い直しは出来ず、更なる混乱中に機先を制されたレイラは頷くことしかできなかった。

（何たる失態。いや、まあ確かにこの流れなら少年とは結ばれる事も出来るだろうが）

レイラの欲しい未来は、これじゃない。

「ただし、私にも付き合って貰います」

騎士の礼まで取っておきながら、やらかした発言のせいでレイラが告白した騎士だとは気づいて貰えなかったとしても、結末だけは変えてみせると。

（姫がこの少年だったというのなら、貞操方面とかは問題ない。嫁になれと言っただけでやるっ！）

だが、全てを黒幕の思い通りにさせるつもりはレイラにも無かった。

（代価は貰うぞ。私と姫の——この少年のハッピーエンドというものを）

満面の笑みの中、目の奥に炎を燃やしながら少年達を手招きし、レイラは打ち明ける。

「王位の篡奪劇に」

絶句する二人には構わず、レイラは少年の手を取ると侍女に顔だけ向いて言う。

「権力を奪ってしまえばお二人のご家族も安泰。特に弟君には今後義弟になって貰うのですから私にとっても大切な方です」

果たしてそう言う問題だろうか、と表情で語る二人のうち先に我に返ったのは少年の方。

「へ？」

握られた手を引かれたのだから当然の反応かも知れないとしても「少なくともここは上からの指示に従っておかねばならないでしょう？」

「それって、つまり……」

「これ以上は言わせないでください。それから、貴女は姫が上手く私を誑かしたと言う報告をお願いします」

自身の言動にきっちり頬を染めつつも、レイラが侍女の指示に織り込んだ報告はあながち間違っていない。少年と結ばれることにレイラ自身は乗り気なのだから。

「お嫌でしたら、仰ってくださいね。無理強いする気は私には……」

「いや、嫌というか、心の準備が……」

最終的に近い結末になる予定だった筈だというのに、レイラが目覚めた部屋へ戻って行く二人を眺める侍女はひどく疲れた顔をしていた。

「……喜んでいいのでしょうか？」

そして、微妙に腑に落ちないものを感じつつもレイラの指示通りの報告をすることとなる。

どうして、こうなった。本当に、いろいろな意味で。

真実と混沌（後書き）

あれ、完結しない？

と言うか妙にムードのない展開で二人の距離が急接近しました。ともあれ、こうして王位篡奪に向けたレイラの暴走が始まるのでした。

はたしてレイラは少年に至高の冠を授けられるのか。

そもそもこの状況からどうやって篡奪をやつてのけるのか？
そんな感じで次続きます。

報告

「こうして私は愛しの姫をゲットしたわけだ」

「ゲットした訳だ、じゃなああい！」

「うぐっ」

満面の笑みで戦果報告をしたレイラに待っていたのは、幼なじみの侍女に襟首を掴まれてガクンガクン揺すられる運命だった。

「心配したんですよ？ 何度もミゲル様のところから飛び出しかけたんですよ？」

ただ一人の主なのだ。アンナからすれば心配なのは当然のこと、居ても立つても居られなかったのだろう。身を隠していなければならぬと言う状況でさえそこまで気にかけていたのだ。

「すまない」

レイラは甘んじて受け入れていた。アンナの怒りを。

「だがな……人払いはあるとはいえ、今の私はこの国の王妃なんだぞ？ 人が見たらどう思われるやら」

「わかっています。ですが、レイラ様は私の……」

「うん、そうだ。幼なじみで、友達だ」

ずり落ちかけた宝冠を押さえながらレイラはアンナに笑いかけ、もう一方の手で抱き寄せる。

「友達だから聞くが、あの後ミゲルとは上手く言ったのか？」

「上手く……とは、どういう事です？」

「決まっているだろう。それを私に言わせるのか？」

胸に抱いたアンナが上目遣いに見上げて返してきた問いにレイラは悪戯ぽい笑みで応じた。

「レイラ様こそどうなんですか？ 姫様に出されていた指示からするともうこのお腹には御子が？」

「いいか、アンナ。想い人が身体を許してくれるなんてシチュエー

シヨンの場合、人が取る行動はだいたいパターン化される」

一つは、どこか恥ずかしくなりつつも好意を受け入れる。一つは、感極まり激しく燃え上がる。

「そして、一つは気圧されたり恥ずかしくなったりグデグデになったりで、結局何も出来ずに終わる」

「何だかレイラ様がどれを選んだのか一瞬でわかったのですが」

レイラはすぐ良い笑顔を浮かべていた。どことなく目が泳いでいて、アンナと目が合ったたび目をそらすせいで語るに落ちている以外のなにものでもない。

「……自分で自分が情けない。突撃はどうした、突撃は！」

「そもそもそんなに簡単に腹がくくれるものでもないですよ。一生の大事ですし、思い出には美しく残したいじゃないですか」

「……ということは、アンナもか」

やたら力説する幼なじみの態度に何かを察してレイラがアンナの顔を見ると、今度はアンナが顔をそらす。

「あ、その……まさか、レイラ様はまだなんて……」

「この裏切り者ーッ！」

と、思わずレイラが叫んだとしても誰も責められまい。いや、責められなかった筈だろうが叫ぶ事も出来ずレイラの身体は不思議な浮遊感を味わい。

「んぶっ！」

顔に感じた痛みと衝撃は顔を何かにぶつけたのだろう。痛みは顔だけでなく腕や足、横腹にもあつて。

「夢、か」

覚醒したレイラが始めに目にしたのはピントのずれてぼやけた床だった。寝ぼけてベッドから落ちたのだろう。

「大丈夫？」

大きな音でもしたのか、ベッドの上からは目を覚ました少年が心配そうにレイラを見つめていて、レイラの恥ずかしさを倍増させる。

「大丈夫です」

涙目になりながらもレイラは声を絞り出し、伸ばした手でシーツを掴むと自分の身体をベッドの上に運び上げた。

「甲斐性なしでごめんなさい」

「いや、それは僕の方で……」

結局、二人が同じベッドでしたことと言えば、王位篡奪に向けた今後の打ち合わせをし疲労回復のために普通に眠っただけだったのだ。

（そもそもああいう状況で人はその種の欲求を丸出しに出来るものなのか？ 普通、躊躇するよな？）

レイラは言い訳じみた疑問を胸中で呟きながら身じろぎし、少年は謝った体勢からまだ顔を上げられずにいた。

「この話題はとりあえず置いておきましょう。最悪、そう言う衝動誘発する薬でも用意して貰うとして」

その発言自体がある意味沽券に関わるものである気もするが、レイラにしろ少年にしろすべき事はたくさんあり、時間は有限なのだ。「今の私達には頼れる味方もほとんど無く、人質まで取られており状況は芳しくありません」

逆に言えば、だからこそ王位篡奪——造反することなど思いも寄らないことだろうが。

「武力で打倒するにしても兵力が無く、上に従う傀儡なのですから権力も無いようなもの」

対して王は多くの兵を有し、権力は言うに及ばず。

「だとすれば、相手の力を無効化するか無視する手段を有するもしくはこちらが相手に対抗できるだけの力を手に入れば勝機はあり得ません」

無効化もしくは無視する手段の一つは暗殺。力を使う前に倒してしまえばいいと言うしごくシンプルな思考の先にあるものだ。

「暗殺の問題点は成功率の低さから来るリスクの高さと、姫様が王位継承順位第一位でない点にあります」

せつかく王を倒しても別の者が王位を継いでしまつては意味がないのだから。

「姫様の秘密を後継者が知っていたとしても知らなかったとしても、最悪の事態が想定できますから」

知っていた場合、醜聞沙汰を恐れて偽王女を密かに始末しようとする可能性があり。

「知らなければ、姫様に結婚話が持ち上がる可能性もあります」

結局秘密はどこかでばれて身の破滅を迎える可能性がある。

「だったら姫君か私達に協力してくれる王族が国王にならない限り、人質を含む身の安全は確保されません」

協力者を王位につけるのは妥協案だが、そもそもレイラ達に協力してくれるような王族が居るかどうか。

（ミゲルや団長が協力してくれれば心強いが、危ない橋を渡らせる訳にもな）

そもそも騎士が主である王を害する計画にすすんで荷担する筈もない。

（が、どこにでも例外は居るからな）

一応条件次第で荷担しそうな同僚をレイラは知っているが、見返りに要求して来るであろうものは今のレイラに払えるものでなく、また主を報酬次第で裏切るような輩である。見返りを受け取ったとたん裏切られてもおかしくない。

（野心家の王族がいれば、実家やあの騎士を利用してつぶし合いさせるのも不可能じゃ無いと思うけどな）

前途は多難である。

「とりあえず、姫様の侍女が帰ってくるのを待ちましょう。全てはそれからです。私も下着以外の衣服が欲しいですし」

毛布代わりの布を身体に巻きつつレイラは呟く。その頬は微かに赤く染まっていた。

報告（後書き）

何故だろう、終わるところか新章突入しそうな流れなんですけど。
恋を置き去りにした謀略劇？

果たして物語はそんな方向に転がってしまっただけ？

実際のところアンナとミゲルはどうなった？

そんな感じで続いてしまいます。

珍客との邂逅

「姫様のお部屋にですか？」

「はい、貴女の待遇は私と同じ姫様お付きの侍女とすることになります。姫様に人目を忍んでここに通って頂くのは無理がありますから」

冷静さを取り戻した侍女に告げられ、目の前の侍女とそろいの服に腕を通したレイラの胸によぎったのは幼なじみの侍女の顔。

（いかな、何とか無事を伝えたいものだが……）

王女お付きの侍女では自由になる時間も限られるだろうし、王女の警備が監視の役目を兼ねている可能性もある。

（うかつに動くのが危険なのはわかっていて。けどアンナは安心させたいし、もしアンナがミゲルのもとを飛び出すようなことがあったら）

爪が食い込むほど拳を握りつつ、表面上何ごともなかったかの様な表情でレイラは侍女の後ろを歩いていた。別に後ろを歩かずとも王女の警護もしたことがある城勤めの騎士なのだ、王女の部屋までの道はわかる。

（と、言うことは私が居たのは主に文官の——兵や騎士の詰め所とは逆方向だな）

囚われていた場所から、首謀者ではなく自身をさらった実行犯の手がかりぐらいは得られないかと微かに期待したレイラだったが、世の中はそうそう都合良くはいかない。もちろん、侍女の格好で同僚と出くわす様なことがなさそうなことだけは偶然にたすけられたのだけだ。

（ミゲルとすれ違う可能性も低いだろうし、大隊長の身分じゃ部屋の警護なんて仕事は回ってこないだろうからな。ミゲルとつなぎをつけるのもかなり難しい、か）

王位篡奪という大風呂敷を広げても足がかりになるような状況に出くわすどころか親しい人との連絡もままならず。

（諦めるな、考えるんだ。アンナを危険な目に遭わせるわけにはいかない。心配もかけたくない）

もしレイラが椅子に座って机に向き合っていたら、苛立たしげに指で机を叩いていたことだろう。打開策が出てこない焦りを机に八つ当たりして。

（ミゲル以外の同僚に事情を話すのは危険だし、話しかけた騎士が監視を兼ねていたらそこで終わりだ）

欲しいのは外部との信頼できる連絡手段。

「良いですか、人目につきそうな侍女としての仕事は私がやります。私達は一蓮托生なのですからくれぐれも……」

（信頼できる相手……くっ、こんな事ならもう少し交流しておくんだった）

侍女の言葉も上の空で、レイラが悔やむのは同僚騎士達と付き合いの悪かったこと。正体がバレることを警戒していたのだから無理もないのだが、ないもの強請りをしてしまうのもまた人間である。

「聞いて居るんですか？」

「あ、や、すみません」

「……考えなければならぬ事が多いのはわかりますが、気をつけてください。一つ間違えば私も姫様も終わりなのですから」

感情の殆ど籠もらぬ視線と一緒に投げて来た一言にレイラは返す言葉もない。

「ごもつともです、それで何が」

聞きこぼしていた話の内容を尋ねると、侍女が告げたのは王女へ来客予定があると言うことだった。

「来客ですか、どなたが？」

「ギルバーオレスト公爵令息のレイル様です」

レイラが耳を疑ったのは言うまでもない。つい先日までレイラがそのギルバーオレスト公爵令息だったのだ。

「あの、なんと？」

「ギルバートレスト公爵令息のレイル様です。しかし、貴女をレイル様と入れ替えるにはいささか問題がありますし」

この侍女からすればレイラが公爵令息と入れ替わるには怪しまれない程度の立ち振る舞いを先に仕込む必要があると見たのだろう。

だが、レイラにしてみれば騎士としての立ち振る舞いも公爵令息としての立ち振る舞いも、寝ぼけていてさえ出来る日常の動作なのだ。（何者だ？ お祖父様が懲りずに影武者でも仕立てたか？ だがこれは……まさに好機だ）

千載一遇の機会、世の中は意外に都合良く動いているのかも知れない。

（今の内に秘密をばらして少年とこの侍女に協力してもらえれば、私はレイルとして大手を振って城を歩ける）

よくぞこのタイミングで影武者をよこしてくれたと、思わず祖父に感謝すらしたくなったレイラだったが、侍女の続けた言葉を聞いて思わず唸った。

「レイル様は間もなくいらっしゃいます、貴女は物陰から様子を見て……」

どうやら考え事をしていた為に二人へ自身の正体を明かす機会を失ったらしい、とレイラが気づいた頃にはもう遅い。来客に備えて侍女は去って行き、レイラは侍女のために作られた控えの間に一人残された。

（千載一遇の機会が……くっ）

自らのミスに凹み悔やみながらもレイラはゆっくりと歩き始めた。入れ替わりは無理でも影武者の顔ぐらいは見ておく必要があると踏んだのだ。分家の誰かを身代わりに立てたのなら相手が本当に誰かぐらいはレイラにもわかる。

（誰だったとしても信用など——）

できない、と胸中で続けるよりも早く、レイラは硬直した。

「姫、お目通り許されましたことを感謝します」

「まあ、それほどかしこまらなくても……」

（何故、何故……）

我に返った時、レイラは既に物陰を飛び出していて。

「はじめまして、お兄様っ！」

「おぶっ」

ドスの効いた声と共に繰り出した拳で実の兄を殴り飛ばしていた。

珍客との邂逅（後書き）

まさかのお兄様登場！

超展開？ ご都合主義？ 行き当たりばったり？

た、ただの伏線回収ですよ？

さて、そういうわけで続くのです。

取り戻された時間

「「なっ」」

侍女と王女が同時に目を見張り、瓜二つの男女を交合に見やる中。
「何故今になつて、しかもこんな時に……」

レイラは肩を震わせ、拳を握りしめていた。レイラからすれば兄のレイルは初対面ではなかった。幼い時から影武者に仕立てられることが決まっていたレイラは、代理が務まるよう兄の立ち振る舞いや趣向を教え込まれていたのだ。

「さあ、あれが兄君です。良いですか、お前は常に兄君のように振る舞うことを心がけなさい」

「わかりました。しかし、なぜちよくせつあわずにこんなところからみるのですか？」

「お前の存在を兄君はお知りにならないからです」

この時のレイルはまだ幼く、レイラの存在を知れば影武者など当然反対したことだろう。そう言う理由で本物の公爵令息がレイラレイルの存在を初めて知ったのはずいぶん後になってのこと。

「何故だ、何故このような真似をしたッ！」

「レイル様、当主様のご意向でございますよ？」

血を分けた肉親が人生を投げ捨てるような真似をさせられていたことを知り兄は激怒したが、レイラはそんな事情など知らない。レイラを影武者に仕立てたしつけ係が一言話ただけである。

「お兄様がお前の存在を知った」

と。だからこそ、押さえてきた激情が理性を振り払い、レイルの頬に拳をめり込ませたのだ。兄は祖父の方針を黙認しているものだと思っただから。

「レイ……ラ？」

頬を押さえながら身を起こした兄の声にレイラは頷いて見せる。

ごく自然と。見つめ合う一組の男女はまるで鏡の前に立つ人のようだった。侍女に化ける為レイラは髪型をいじっていたし、薄く化粧もしている。レイルは殴られた時口の中を切ったのか一筋の血を口から流していた。そもそも侍女と騎士では服装がまるで違うと言うのに。

「……ッ、すまないッ！」

「お兄様?!」

止まった時が動き出すことで鏡に向かう人の図が崩れる。騎士は床に頭を叩きつけるがのごとく頭を下げ、レイラは兄の行動に狼狽える。

「私をもっと早く知っていれば……あのくそジジイに引導を渡してお前を自由にしてやれたというのに」

レイルは顔を上げることなく、呻くように言葉を紡ぐ。

「しかも、お前が一番難しい局面に至った時、側にいられなかった」
悔恨の念を語るのは強く握りしめた拳と今だ上げぬ頭。

「詫びて済むとは思っていない。私がこうしたいからしているただの自己満足にしかお前には見えないかもしれない。だが、それでも……それでも、私はッ……」

王女の前だというのにレイルの意識はただレイラにのみ向いていて。

「……お兄様」

レイラの誤解が解けたのはまさにこの瞬間だった。正確に言うなら誤解が完全に解けたわけではなく、祖父のように自分のことを道具扱いしていたわけでは無いと認識を改めた程度ではあったが、生まれてからレイラが送ってきた日々を考えれば無理もない。

「頭をお上げください」

「しかしッ」

むしろ、ここまで平身低頭されたことに若干ながら困惑もしていた。

「姫様の御前ですよ?」

「はっ」

王女をダシに使ったのは無意識にだったが、ここに来て二人は同時に気づいたのだった。部屋の主をそっちのけで兄妹の初顔合わせをしていたことに。

「あのー」

「し、失礼しました」

王女の声を知覚したレイルとレイラは同時に頭を下げた。それはもう先ほどのレイルの如く——とまではいかなくとも床に額を擦りつけんばかりにである。

「もう良いのです、頭をお上げ下さい」

「はっ」

謝罪の言葉を口にした兄妹に面を上げさせると、王女を演じる少年はいつかの様に手を組み直した。

「よく似ているとは思いましたが、そう言うことだったのですね」

少年は、二人のやりとりからある程度の事情を察し微笑む。

（しかし、参ったなあ。と言うことは僕が最初に見とれたのはやっぱり男で……）

問題があるとすれば、レイラのしたこと先日の告白をレイルのしたこと本物の公爵令息の告白と認識し、内面で密かに凹み苦悩している事だろうか。

（この状態でレイラさんと一緒になるのは裏切りだよな）

「も、申し訳ありません」

まさに本来の性別で対応した時少年にレイラが抱いた葛藤と苦悩をまるで再現するかのような心理状態になっているとはレイラも気づかない。偽王女である少年の謝罪とめまぐるしく変わる状況にいつぱいいつぱいだっただから。

「姫様、先ほどの物音は何事ですか？」

「いえ、何でもありません……場所を変えましょう。奥で話した方が幾分か都合がよろしいでしょう」

外に居る警護の騎士への返答に続ける形で少年は二人を促し。

「はい」

兄妹は揃って頷く。絆は取り戻され、殆ど始まっても居ないような状態で止まっていた二人の時間が動き出す。

「つもる話もあるでしょうが、レイルにも聞いて欲しい話があるのです」

ただ、少年にも打ち明けねばならないことが出来ていた。それが誤解の産物だとは気づかずに。

「場合によっては貴方方に謝らなければならないことなのですが…」

心を痛め、表情を曇らせる。

「「ひ、姫様？」」

「まず奥に行きましょう」

沈んだ表情に驚く二人へ頭を振ると、少年は再度二人を促した。

取り戻された時間（後書き）

何だかややこしい誤解が生じてしまいました。

これはレイラが再びピンチか？

とはいうものの、何やら味方っぽいお兄様の登場で殆ど『詰み』の
状態だった状況が好転しそうな感じですよ。

果たしてこの先どうなるのか？

続きますよ。

拒絶

「レイラ、この際レイルにも知っていて貰おうと思うのですが……」
「はい」

頷いたレイラには王女を演じる少年が言葉を続けずとも何のことを言っているのか理解していた。問題は兄が信用に足るかどうかだが、これについてはレイラ自身に一つ腹案がある。

「お兄様、姫様が今から明かされる事は他言無用です」

それでも釘を刺しておくに越したことはない。王女がレイルを信用しているから打ち明けるのだとレイラは強調し、兄を注視したまま脇へと下がった。

「レイラ……」

（うん。戸惑ってはいるが、いつものお兄様だ）

信に足る相手が見極めるような視線も念の為であり、レイラ自身はもはや疑っても居ない。影武者になるため見せ続けられた兄の行動からレイルが嘘をつく時の行動パターンは既に見抜いている。

「まず貴方にして頂いた求愛ですが、私には応じられません」

（姫様？）

ただ、レイラが見抜けなかったのは口を開いた偽王女の意図。紡がれる言葉の意味と先にある結論。

（何を仰って……）

「理由をお聞かせ願えますか？」

訪れた沈黙の中、レイラが少年の真意に気づくよりも早く、問い返していたのはレイルだった。

「そもそも私には求愛して頂ける資格がないのです」

「資格がない？」

「はい、私は本当の王女ではなく——」

身代わりに仕立てられた者であること、そして実際には性別まで

もが違うこと。

「なるほど」

「正直に申し上げるならば、同性であるはずの貴方に心惹かれても
おりましたか」

（まさか——と言うことは両思いだったのか）

完全に聞き手に回っていたレイルが少しだけ驚いたような顔で偽
王女を見た時、レイラは別種の驚きと共に心を躍らせたが想定外の
幸せは長く続かなかった。

「その後、私は貴方のふりをしたレイラと一緒になるよう命じられ
ました。王女の死を隠し通し、同時に公爵家を手中に収めるため」
一緒になるのくだりでレイルの表情が険しくなるが、舞い上がっ
ているレイラは気づかない。

「姫——便宜上このまま姫と呼ばせて頂きますが、ではレイラと姫
は」

「いいえ、レイラは私を慕ってくれていますし、受け入れてくれる
と言っていますが……私にはレイラの想いに答える資格もないので
す」

「「え？」」

「気づくのが遅すぎました。ですが、貴方に惹かれておきながらこ
こでレイラと一緒になんてはレイラも貴方も裏切ること——」

思わず声を重ねたレイルとレイラの前で少年は俯く。

（なんだ、これは……私か、私がウジウジ悩んで打ち明けられなか
ったからなのか？）

一度は完全に掴んだ手がすり抜けて行くような感覚にレイラは愕
然とした。もし、王女に告白した騎士が自分であったと明かしてい
ればこんな状況は訪れなかったのだから。

「姫様、それでは姉は……私達はどうなるのです？」

「っ、ですが……」

当然自身と姉の安全がかかっている侍女はかみついてくるが、割
り切るには王女を演じる少年が純粹すぎたのだ。

（私のせいかな？ 私の……）

呆けたレイラの耳は少年と侍女の声を素通しし、床に向いたレイラの視界はぼやけ、霞み始める。

「勘違いなさっているようですので、あえて申し上げます」

（……お兄様？）

心ここにあらずと言った様子のレイラが兄の声を認識できたのは、兄の一挙一動へ常に気を配れと言われ続けた習慣のせいだった。

「私は男を妻にする気などさらさらありません。また、先日の言は誠に勝手ながら撤回させて頂きます」

「そうですね……そうですね」

レイルの声に棘が含まれていたことを少年は欺かれていたことへの憤りととったのか、沈んだ顔に苦笑を浮かべる。

「付け加えるなら、私は姫が嫌いになりました」

だが、レイルは容赦ない。

「それは結局のところ自分が大切な人間の身勝手な言い分です。貴方の言動で窮地に立たされる人が何人もいるのですよ？ 私は裏切って貰って結構。むしろ『私への信義を守る』という理由で誰かが泣いたり身を危険にさらされるなんて状況になった方がよほど居心地が悪いです」

「……っ」

「人のせいにされては迷惑なんですよ。『人を裏切りたくない』と言う気持ちは立派です。ですが、『自分が人を裏切ったと言う事実を作りたくない』は自分が汚れたくないだけのエゴです」

「私の言い分はただのエゴだと？」

「そうですね、ついでに言うなら独りよがりでもありますか。……長々とくだらないことを言いましたが、私が貴方を嫌いになった一番の理由は」

レイルは偽王女に鋭い目を向けた後、視線で一人の女性を示して見せた。

「レイラを泣かせたことです」

「姫様……」

「……あ」

少年はそこで初めてレイルが怒っているわけに気づき、同時に己を恥じた。

「女性を泣かせることは罪ではありませんか？ もし申し訳なく思うなら——責任をとってレイラを大切にやって下さい」

レイルからすれば、王女に告白したのはレイラしかないのだ。王女を演じる青年を見る目、同性であるにもかかわらず心惹かれていたと少年がもらった時の嬉しそうな表情、全てが語っていた。レイラが少年を本気で慕っていることを。

「レイラはもう姫が嫌いになったか？」

などと問うまでもない。レイルが敢えて口に出したのは、鈍い少年に思い知らせる為だった。

「姫様…… お兄様がお好きなのでしたら毎日でもお兄様の格好をします。ですから、お側に…… どうか」

「レイラ…… ごめんなさい、ごめんなさい」

涙は女の武器という。勿論この時レイラは本当に取り乱し泣きじやくっていたのだが、結果的にこれが少年の心に大きく作用した。

「さて、少し席を外しませんか？」

複雑な気持ちを抱えつつもレイルは表面上何事もない様を取り繕いつつ立ちつくしていた侍女に声をかける。状況を顧みれば二人が邪魔者なのは誰の目にも明らかだったのだから。

拒絶（後書き）

かつこいい兄貴、書くの難しいですね。

うまくいくかと思った恋模様、怪しくなった雲行きを打ち消したのはお兄様でした。

そういうわけで続きます。

報告その二

「こうして私は愛しの姫をゲットしたわけだ」

「ゲットした訳だ、じゃなああい！」

「うぐっ」

満面の笑みで戦果報告をしたレイラに待っていたのは、幼なじみの侍女に襟首を掴まれてガクンガクン揺すられる運命だった。

「心配したんですよ？ 何度もミゲル様のところから飛び出しかけたんですよ？」

ただ一人の主なのだ。アンナからすれば心配なのは当然のことで、居ても立つても居られなかったのだらう。身を隠していなければならぬと言った状況でさえそこまで気にかけていたのだ。

「すまない」

レイラは甘んじて受け入れていた。アンナの怒りを。何だかデジヤヴめいたモノを感じてもいたが、そちらは気にしないことにした。「とにかく、お兄様が来て下さって本当に助かった。身代わりの件があつたとは言え誤解していたことを悔いるばかりだ。今なら何とつかお兄様の靴の裏を舐めても良い程に私は感謝して居るぞ」

「いえ、私もレイル様のことはそれ程存じていた訳ではないのです
が……レイラ様、その言い様は」

「いや、それぐらい感謝していると言うことだ。私にそう言う趣味はない」

何とも言えない目で見られて慌ててレイラは弁解する。

（対象がお兄様ではなくあの少年だったら……うん、大丈夫だ。そう言う趣味はない）

ついでに脳裏で相手のイメージを差し替えて、安堵もした。もっとも、見ている方からすれば今の間は何だと思ふところなのだが、付き合いの長い敢えてアンナはスルーすることにする。

「だいたい私がこうやって大手を振って城から出てこられたのもお兄様のおかげなんだぞ？」

「言われてみれば、そうですね。でもどうやって？」

ミゲルの屋敷は城の外であり、説明を聞く限りではレイラが外に出るのは不可能な筈なのだが、レイラは現にそこにいるのだ。騎士の方の格好で。

「レイラ様、そのお召し物を見て嫌な予感がしてきたのですが、レイラ様は？」

「もちろん侍女の格好で姫の側に控えていると思うぞ」

「……何させてるんですかあああつ！」

アンナの絶叫を責められる者はどこにも居ないだろうが、ここに騎士姿のレイルが居る時点で予測のついた事だった。

「私を思ってお兄様の意に沿うただけだぞ？」

「どの辺りが？」

「お兄様は今までのことを本当に悔いておいででな。私の為なら王の首とて刎ねてみせるし、どのようなことでもしてみせると仰ったのだ」

レイルの言を受けて冗談半分にレイラが打診したところ、レイルは王女を演じる少年に侍女の服を要求したのだ。

「流石に私の着ていた服を着るのは少々倒錯的なので遠慮すると仰っていたが、女物の服を着るのに躊躇はなかったぞ」

兄の様子を見て、レイラは確信した。レイルが紛れもなく本気であつたことを。

「あの、私の中のレイル様のイメージが音を立てて崩れ始めたのですが」

「安心しろ、それは私が通った道だ。双子の片割れとしては複雑なものがあるけどな」

引きつった表情で呟くアンナの前で、いかにも芝居めいた調子にレイラは嘆いて見せる。

「さすがはレイラ様のお兄様と言うことなのでしょうが」

「ちょっと待て、アンナ。それはどういう意味だ？」

「言葉通りですよ？ 本当に大切な相手の前では手段とか外聞などうっちゃってただひたすら暴走するところとか」

「っ」

「レイル様もレイラ様が大好きなんですよ。愛は愛でもこちらは兄妹愛でしょうけれど」

心当たりがあつたのか思わず言葉を失つたレイラにアンナは微笑む。

「そうか、そうなんだな」

「レイラ様？」

「いや、私にとって肉親の愛情というのはすごく新鮮だからな」

訝しむアンナにちよつと戸惑つていたんだとレイラも微笑みを返した。そこにあつたのはいつもの二人。

「が、本当に大丈夫だよな？ いきなり襲われたりしないよな？」

「ありません、って言うか色々ぶちこわしじゃないですか！」

「いや、同僚の騎士が……」

「同僚はいいですッ！」

いつもの二人だった。どこかズレたことを言つたレイラがアンナにツツコまれるといういつも通りの展開。

「ふう、何だか安心するな。いつも通りで」

「急になんですか？」

「いや、お前をミゲルに預けて数日だというのにな。少しアンナが遠くに行つてしまった気がしてたんだ」

「レイラ様」

きよんとしたアンナの顔を見ながらレイラは少し寂しげに笑い。少しだけ呆れたように息を吐いたアンナはレイラに歩み寄ると幼なじみの身体を緩く抱きしめる。

「私はいつまでもレイラ様の侍女、そして……」

「うん、いつまでも友達、だろ？」

抱きしめられながら口にした主人の言葉にアンナは頷いた。

「わかつてる……いや、私がどうかしていたんだ。姫とその……想いを遂げる機会があったんだが何も出来なくて。そのくせお前はしつかりミゲルと……男と女の関係になっ

ていたって夢を見て」

「えっ?」

置いて行かれた気がしたんだ、とレイラは言葉を続けられなかった。

「えーと、アンナ。その何故か濁った発音の『え』の意味を聞いても良いか?」

再び訪れたデジャヴの予感を押さえ込みながら、レイラは声を震わせつつ問う。

「あー、えーと」

何故か視線を合わせようとしないうなづみに。

「そもそも、何故目をそらす?」

「べ、別に目をそらしてなんて……」

「わかった、だったら正直に言えるな?」

「えー、あ……わかりました」

攻防は数十秒間、長かったとも短かったとも言える時間の先、二人の視線は再びあった。

「では、正直にお話しします」

「ああ」

どちらももう目はそらさなかった。

「冗談です」

「は?」

ただ、アンナの一言にレイラの目が丸くなって。

「だから、冗談なんですって。私だってたまには冗談も言うんですよ?」

「アンナ……」

「だって、レイラ様思ったより真剣に受け止めていらっしゃるから

言い出しにくくて……」

何かを押し殺した声に首をすくめつつアンナは弁解してみるが、当然ことは収まらない。

「アーナーナー！」

「きゃー」

叫んで襲いかかる主人に押し倒されつつ、アンナは棒読みの悲鳴を口にする。それは、仲の良い年頃の娘達がただじゃれ合っているだけの光景だった。

「レイル、あれから……」

「「あつ」「」

もつとも、第三者が見た場合、誤解させるの十分な光景でもあったのだが。結果的に、レイラが自分の正体をミゲルにまで明かす事になったのは言うまでもない。

報告その二（後書き）

遂にミゲルにまでレイラの秘密が……。そんな感じで次に続きます。

報告その三

「ただいま戻りました、お兄様」

「もういいのか。それで、首尾の方は？」

「っ、……概ね上手くいきました。ミゲルともつなぎはつけられましたが他の同僚にも会って不自然にならない程度に情報収集を……」
先日の自分とほぼ同じ格好をしたレイルに問われ、一瞬何とも言い難い気持ちに襲われつつも、レイラは自身の行動とその結果を報告する。なんだか報告ばかりしている気もしたが、兄の献身で得た情報は貴重なものだった。

「お兄様のおかげで大まかにですが策のメドも立ちました。国王もお祖父様ですが影で暗躍していた為に買った恨みや抱かれた不信感があちこちで燦っているようで」

王女の代役を務めている少年やお付きの侍女の様に身内を人質に脅迫されて従っている者。脅迫をはねつけ、結果肉親や地位など何かを奪われた者。良いように利用され切り捨てられた者。

（まあ、私も王女に――少年に告白したどさくさで逃げ出すことが出来なければ彼らと同じ状態だったろうしな）

レイラと幼なじみ^{アンナ}の侍女を救ったのは偶然と幸運、そしてレイラ自身の機転だった。どれ一つ欠けても今の状況は無かったことだろう。

（偶然と幸運に感謝だ。そして、私は勝ち取ってみせる……アンナや少年と一緒に笑い会える日を）

レイラの決意は固い。

（べ、別に自分たちの居場所を勝ち取って心ゆくまでいちやつきたいとか、その先にあるものを堪能したいとか、そんな理由では……）
若干不純な動機も上乘せされているようだったが、だからこそのつもりのレイラである。

（いや、いかんぞ。そう、ついばむようなキスとか不意を突いての抱擁など……私が求めているのはもつと純粹なものでな……）

「なるほど。となると……潜在する反国王派を扇動して国王を？」

「はっ、いえ。それで討ち取れるほど楽な相手では無いでしょう。

少なくとも二重三重の反乱を仕込むか、こちらが不平分子の存在を密告して信用を得、油断させた上で事に当たるぐらいはしないと勝機はないかと」

想い人との甘いシーンを一瞬頭に過ぎらせたところで兄から質問が飛び、我に返ったレイラは飛び散っていた冷静な思考を慌ててかき集めて返答する。

「だらうな」

あっさりとレイルが頷いたのは、同じ見解だったからだろ。ただ、レイルが顎に手を当てたまま口にした提案は、レイラが既に脳内の卓上から丸めて投げ捨てたものだっただけ。

「いつそのことその『お祖父様』をぶつけてやるか？ 公爵家と王家がぶつかれば王家もただでは済まんだろう。両方が共倒れになってくれれば問題が一気に片づく」

「ですが、それではお兄様が」

却下理由の一番大きな理由はまさしくそこにある。王家の反逆となれば一族郎党連座で処刑されてもおかしくない。兄の影武者の為生まれなかったか死産扱いになっているレイラは処罰を免れるかも知れないが、公爵令息として世に認められた——謂わば『日向の存在』であるレイルに同じ手段は使えない。

「レイラ、前も言ったけどな、私はお前の為ならどのようなことでもするつもりなんだ」

「お兄様」

「それで命を失うとしてもな」

レイラに見つめられ、レイルは照れたように頬をかくが、レイラもそのまま見送るつもりはなかった。

「では、許可できません」

「なっ」

「私の描くハッピーエンドにはお兄様の席も用意してあるのです。途中退場はご容赦願います」

絶句したレイルにレイラは淡々と言つてのけ、想定していた作戦に修正を加える。

（お兄様、まさかそこまで責任を感じておられるとは）

レイラは気づいていなかった。レイルが死すら厭わぬつもりで居た理由が責任感由来のものだけでなかったことに。

「しかしだな、騎士たるものいざというときは身の危険など顧みず使命を全うするものだろう？」

つまりはヒロイズムというか自己陶醉の産物を多量に含んでおり、ついでにもう一つ今まで会うことすら出来なかったレイラへの愛情がレイルを駆り立てていたのだが、レイラに理解できるのはヒロイズムの部分までである。

「ですがお兄様、他に策もある状況下で何の落ち度もない使用人達まで巻き込まれるような策はとれません」

「わかっている。無関係な使用人は決行前に暇を出すと言う手もあるのだがな、言いたかったのはお前の為に命を惜しむつもりはさらさら無いと言つ一点だけだ」

「お兄様！」

「そう声を荒げるな。命を惜しむ気はないが粗末にもしない」

目くじらを立てるレイラにレイルは笑つて言つと、侍女用に作られた控えの間へ引つ込んだ。

「お兄様？」

「少し待っている、お前の服を持ってくる。いつまでも私が戻らなければあのくそジジイが怪しむからな」

かといってレイラが家に戻ったのでは飛んで火にいる何とやらだ。「公爵家の内部事情は悪いが信用できる家人が居ないからな。私が姫の元に通う名目でここに来て、お前や姫に伝えることになると思う」

「わかりました。ではこの服を……」

兄の言葉に頷くとレイラは服の襟元を広げ、ボタンを外し始める。
「っ！ 待て、ここで脱ぐつもりか？」

「ええ」

当然、レイルは慌てるがレイラは気にした様子もなく上着を脱ぎ
終え、既にシャツのボタンに手をかけて――。

「私にも恥じらいはあるつもりですが、お兄様の前で着替えないのはフェアではないのです。何故なら、私はお兄様の着替えをいつも見せられておりましたから」

「いや、公平とか不公平とかではなくてだな……」

「そもそも、着替えだけではありません。お兄様の日記や手紙も筆跡を学ぶ為に見せられましたし」

「は？」

尚もレイルは食い下がろうとするが、レイラの続けた言葉を聞いた瞬間、見事に固まった。

「ちょ、ちよつと待て……手紙？ 日記？」

「ええ、恋文や日記の人にはちよつと聞かせられないあんな記載やこんな記載も」

「うぐああああつ！」

ぎこちなく動き出した兄の視線を受けながらレイラはこくりと頷き、続く言葉がかなりのダメージになったらしく侍女の服を着たま
まのレイルは絨毯のしかれた床の上で悶絶する。

「……レイラ」

「何でしょうか、お兄様？」

「なあ、私はどうすべきだと思う？」

絨毯の上で転げ回ること暫し、よろよろと身を起こしたレイルは
レイラに問うた。

「おすすめの選択肢は、王とあのジジイを道連れにこの世に別れを告げるのと、行き先も告げずに旅に出るのの二つなんだが」

まるでレイラが先日幼なじみの侍女に聞いた時のようなすわった

目をしていた。

（なるほど、アンナはあの時こんな気持ちだった訳か……）

敢えて指摘するなら、アンナはレイラほど冷静ではなかった筈だが、それはこの際胴でも良いことである。

「とりあえず、お兄様は落ち着いて下さい」

世の中、落ち着いてくれと言われて落ちてく人間は希有だと思われるが、聞き入れられない時はレイラも強硬手段をとるつもりだった。

「大丈夫だ、落ち着いて居るとも。そう言うわけで通してくれ。思い立ったが吉日、特攻あるの……」

（まあ、こういう状況ではひっぱたくのが一番手っ取り早そうではあるよなあ）

かつての自分が幼なじみから受けた一撃を思い出し、胸中で嘆息しつつもレイラは腕を振り上げた。

報告その三（後書き）

ネタバレしてしまうので、「お兄様の受難」というサブタイトルを
没にしました。

まあ、兄って辛いですね。

続きます。

友と約束

「と、まあお兄様の暴走もあつたんだが……こうして私達は王を倒し返す刃でお祖父様も倒して自分達の居場所と幸せを手に入れたんだ」

「思えば長い道のりでしたね、レイラ様……と言いたいところですが」

遠くを見る主人に一瞬合わせてはみたアンナだったが、そのノリは最後まで続かなかった。

「上手くいかない現実逃避に、『上手くいきましたよ』的な後日談の雰囲気を作つて現実逃避するのはいかなものかと思えますよ？」

そう、今のレイラ達はどちらかと言えば『私達の王位篡奪劇はこれからだ！』的な状況なのである。

「わかつてはいる、わかつてはいるんだ。謀が漏れないように細心の注意をしつつ反国王派の貴族に色々働きかけたり、素人のふりをして今更倣うまでもない騎士作法の基礎を学ばされたり、仲間になつてくれそうな人を密かに探したり。色々やつて疲労困憊なのに少年と二人の時間が作れなくて――」

それで居てレイラの思い人である少年を偽の王女に仕立てた黒幕からは、よけいなお世話的な品が支給されるのだ。

「媚薬、ですか」

「言い訳でしかないのはわかつている。が、そんな薬無くても私は彼にメロメロだし、日頃の疲労と計画が上手くいかないイライラから、こう、何というか……ずぐわっしやあぁっ、とかそんな勢いではしたない真似とかしてみたくはあるのに、状況が私を許さないのだ」

だから、現実逃避ぐらい許して欲しいというのがレイラの言い分であるらしい。

「レイラ様、女性が自分からはしたくない真似をしたいというのはどうかと……そもそも、その効果音は何なんですか？」

「いや、何というか鬱屈としたものを全部消し飛ばしてしまえたらいいなという願望を擬音にしてみたんだ」

「参考までに何の音だったか聞いても？」

「確か、攻城兵器が的を消し飛ばした時の音だったはずだ」

「はあ」

聞いて後悔したとでも言うようにアンナは嘆息すると、視線を窓の外に向けた。

「レイラ様のお相手はこんなレイラ様のどこが良かったかしら」

などとは口が裂けても言えない。だが、レイラは自身と王女の身代わりをしていた少年が両思いであったことを既に明かしている。

「それで、薬の方はどうなさっているんです？」

「今のところは使っているふりをして小さな容れ物に移し替えたりしている。恋する乙女としては人の恋心をもてあそびたくはないが、効果があるならこの薬は有用だからな」

酒などに入れて相手に飲ませて不祥事を誘発することも出来るし、薬に併用して標的を誘惑しこちらの思い通りに事を運ばせることが出来るかも知れない。

「まあ、使わずに済むなら越したことはない。お祖父様と国王陛下が顔合わせするパーティーなんかで二人が顔を合わせてる時に混入できたらきつと素敵な事態になるんじゃないかとは思っけどな」

「レイラ様……」

熱の籠もった目で互いを見つめながら抱き合う現国王とレイラの祖父を一瞬想像してしまい思わず顔を片手で覆いながらアンナは声を絞り出す。素敵でなくておぞましいの間違いでしょう、などとは一侍女にすぎないアンナには言えない。そもそもレイラが口にした前段階でも充分不敬罪が適用されるはずだ。

「いや、黒幕はおそらく国王陛下で間違いなさそうだからな。媚薬のお返しにそんなことを考えても許されるんじゃないかと……」

「確かに、王位篡奪をたくらんでいる以上、何を今更かも知れませんが、今のお話は危険すぎますっ！　上手く言ったらどうするんですかっ！」

国王は既に四十歳を過ぎた中肉中背の男性、レイラの祖父も六十を過ぎていたとはいえ健康そのものである。中年男性と初老の男性によるラヴシーン、そんな光景が広がったら目撃した人の大半が不敬罪になる筈だ。

「すごいな、アンナは。私は100%失敗すると思っていたぞ。何とか冗談のつもりだったのに」

もっとも、レイラの心ない一言にアンナの怒りが爆発したのは言うまでもなく。

「笑えない冗談を仰らないでくださいっ！」

「仕方ないだろう。冗談でも言わないとやってられない気分だったんだ」

「レイラ様、何を？」

眉をつり上げぷりぷり怒ったアンナの前でレイラは懐から小さな容器を取り出すと、部屋にあった戸棚から勝手に取り出したグラスに容器の中身を注ぐ。

「実はな、アンナ。陛下とお祖父様の両方へ一度に使うというのは冗談だったんだが……」

「レイラ！」

グラスを眺めつつレイラが語り始めた時、部屋のドアが勢いよく開いた。

「先代のギルバーオレスト公爵が……なくっ」

「ミゲル様?!」

驚いて振り返るアンナの目に映ったのは、テーブルの脚に足を引っかけてつんのめった想い人の姿。

「うわあああっ」

「きやあああっ」

アンナの視界いっぱいに広がってきたミゲルは勢い余って覆い被

さるようにアンナを押し倒す。

「アンナ、ミゲル…… 欲求不満気味の私の前でそう言うのは止めて欲しいんだが。当てつけじゃないよな？」

「もちろんです！」

覗き込んだレイラの顔に二人は声を揃えて言い返し。

「まあ、冗談はもう置いておこう。そこまで慌ててミゲルが来たと言うことは、お祖父様が」

「ああ、亡くなられたよ。と言うより殺されたと言うのが正しいんだろうね」

「やはりな」

かなり衝撃的な内容に聞こえたのに、レイラは驚かなかった。まるで始めから予知していたかのように。

「私が侍女のふりをしてお祖父様の手の者から逃れていた時——」
「酌婦や娼婦に化けて城下町に隠れても良かったんだが、あいにくとそっちの技術は会得していないからな」と言っただが、確かに技術は会得していないもののコネのほうはあったんだ」

性別を偽り騎士として過ごしていた頃、レイラは同僚に手を引かれ娼館に連れ込まれた事があった。勿論、同僚の騎士もそれなりの身分の騎士であり、身分相応の館をチョイスしたはずだった。

「当然だが私にはよけいなお世話だったし、お相手を出来るはずもない。操を立てている相手が居ることにしてお相手の女性の身の上話を聞いただけで終わっただが……」

「そう言えば、レイル…… レイラには意中の人がいるって噂になったことがあったな。あの噂の発端がそれか」

「うん、そういうことだ。その後私が姫に告白して辻褄は偶然にも合う形になったわけだが——」

この時レイラの話し相手になった高級娼婦が、かつてギルバーオレスト家の謀略によって家を取りつぶされた貴族ゆかりの娘だったのだ。

「話を聞いて申し訳なくなっただけ私は事情の一部を彼女に打ち明けた。

まあ、お祖父様を快く思ってたこととかその辺りをだ」

レイラが自身をギルバーオレスト家の者と打ち明けたせいで一時は殺意込みの視線を向けられた事もあったが、身内まで駒扱いしているという内情をレイラが話すと敵意の矛先を向けにくくなったらしい。

「その時は私も幸せな未来など無いと思っていたからな。彼女に大いに同情して、お祖父様を亡き者にする為なら協力は惜しまないと申し出た」

これを機にレイラと娘の関係は一気に改善された。

「おかげで仲良くなれたんだが、想い人が居るといった手前どうどうと娼館には通えなくてな。こそこそ隠れながらたまに遊びに行ってお祖父様への暗殺計画を練ったりしたんだ」

「と、言うことは……」

ここまで話が進めば、レイラが何故こんな打ち明け話を披露しているのかアンナにもわかる。

「私は、約束は守る女だぞ？　彼女はこの日の為に血を滲むような努力をしていたんだ」

殺人は思いとどまらせるべきかと悩んだことはレイラにもあった。彼女にはそれが全てだったんだ」

レイラから何かに使えればと媚薬の容れ物を渡された一人の高級娼婦は、一瞬だけ年頃の娘の顔に戻って笑顔でありがとうと言った。「汚い真似をしたとは思う。お祖父様をどうにかしなければいけないかったのはわかっていたけれど、だったら手を汚すべきなのは私だったかも知れないんだ」

だが、それでは友人が家の仇をとれない。

「後悔はしている、けど前に進むことを私は諦めない」

ミゲルとアンナ、二人分の視線を注がれながら、レイラは呟いた。

友と約束（後書き）

打ち切りエンドと見せかけて物語は大きく動きました。
さらば、お爺様！
残す敵は後一人？
そんな感じで続くのです。

篡奪劇のあとに

「ふはははは、そうかあやつが死んだか」

国王の執務室は心底愉快そうな主の声に支配されていた。この喜びようも王からすれば当然のことである。

「ギルバーオレスト家のくたばりぞこないめがな」

臣下でありながらまさに目の上のこぶであったギルバーオレスト元公爵が死んだという知らせが舞い込んだのだから。そもそも王も死んだ老人も表には出ず後ろから謀略を練って自身の目的を達成する似たもの同士。表面上は主従であつても水面下の謀略戦は数多くあつた。

「思えば長き因縁よな。父上が身罷つた時あの老人は弟を王にせんとたくらみおつた。偽王女^{あれ}へ孫の小せがれが求婚した時、余は小せがれの独断と見たが……」

謀略として、かの老人が糸を引いていてもおかしくなかつたのである。

「持つべきものは優秀な臣下よ」

城下で暴れた正体不明の男達を近衛騎士団の騎士が捕らえた、しかもそれはギルバーオレスト家の手の者であつたらしい。

「あの時小せがれの暴挙を止められ無かつたは余の臣下が優れていたのか、あやつの家臣が無能であつたか。いずれにしても内部の対立を疑うこともあれがなくてはなかつたであらうな」

不自然さを感じた王は推測し、裏付けをはかる為に細作^{くさく}を差し向けた。

「おそろくだが、あの求婚は嫡男の独断。しかもギルバーオレスト家の元当主と……いや前当主とあの嫡男は対立しておると余は見る」

臣下の前で語った言葉を肯定する材料を細作は持ち帰り、国王は問題の公爵家嫡男と瓜二つの侍女を城内に見つけて現状を優位に運ぶ名案を思いつく。事実を知る者が居たとすれば、呆れるであろう

『当人を捕らえて当人の身代わりに仕立てる』と言うアイデアを。
「これで、小せがれの首をあの娘とすげ替えられればギルバーオレスト家との因縁も終わりよ」

国王はまだ知らなかった。自身が拉致させた侍女が正真正銘ギルバーオレスト家の令嬢であったことも、その令嬢が中心となつて自分の首と王位を狙つた策略が密かに動きつつあることを。

「あの娘が産んだ子は余の孫、今までとは違う良い関係が築いてゆけることであらう」

ただ、都合の良いことを吹き込んで育てた偽王女の子を思うように動かし己が権力を思うがままに振るう姿を夢想し国王は口の端をつり上げた。心地よい光景であつた、王にとっては。

「陛下」

自身を呼ぶ声で現実に取り戻されなければ、国の行く末をもう少し堪能できたことだろう。

「何事だ」

明るい未来の想像図を中断させた臣下に王が問えば、問われた臣下はかしこまって目通り願っている者が居ることを伝える。

「何でも至急お耳に入りたい事があるとかで」

「ほほう。確か、あの時ギルバーオレスト家の手の者を捕らえた男であつたな。通すが良い」

目通りを願つた男の名はミゲル。レイラの友人にして近衛騎士団の大隊長を務めるあのミゲルであつた。

「私のような者が拝謁を賜り、恐悦至極に――」

「よい。して、余の耳に入りたいことは何だ？」

形式ばつた挨拶を制した王にミゲルが語つたのは、国王への暗殺計画が進行中であるというもの。

「ふむ、不屈きにも余を亡き者にせんと企む者が居るといつのか。あいわかつた」

国王は鷹揚に頷くと側に控えていた文官に何事かを囁き、再びミゲルに向き直る。

「しかし、そちはギルバーオレストの息子とは親しいのではなかったか？」

「それ以前に私は陛下にお仕えする近衛騎士です」

国王からすれば目の前の大隊長は自分が取り除こうとする公爵家嫡男の親しい友人でもあった筈。むろん、こんな事を王が知っているのも公爵家の嫡男を偽物とすり替える策のおりレイルと親しい人物を徹底的に調べさせたからである。

「そちの忠義はありがたいが、余には少々見え透いて見えるのでな者ども」

「「はっ」「」

「この者を牢へ繋ぎ見張りをつけよ」

故に王はミゲルの語った言葉を信じることが出来なかった。

「何を思つて余の前に現れたかは知らんが、ちょうど良い。よいか、あの者を牢に入れるようには命じたが同時に決して死なせてはならん」

ただ、ミゲルにはまだ価値が残っていたことも事実だった。

「公爵家の小せがれをあの娘と入れ替えたおり、入れ替えに真つ先に気づくとすればあの者であろう」

そのミゲルにすり替えた娘が本物のレイルであると言わせることが出来たなら、計画も進めやすくなるのは間違いない。

「しかし陛下、あの者が陛下に従わぬ場合は？」

「そのようなことあるう筈がなかるう？ 余は国王であるぞ？」

臣下の疑問に、国王は笑みと言葉の双方で答えた。言下に従わぬ時はいくつもの手段を用意していると続けて。

「ははっ、陛下のお言葉もつともにございます」

「うむ、わかればよい。が、これから忙しくなるうな」

頭を下げた臣下を一瞥すると王は歩き始める。水面下で謀略戦を繰り広げた相手とはいえ表向きは君主と臣下であるのだ。息子に地位を譲っているとはいえ元は国内にて五本の指に入る大貴族が亡くなつたのなら君主としては相応の対応を求められる。

「表だけでなく、裏もまた」

謀略面でも公爵家につけ込む絶好の機会なのだから。

「現公爵は父の操り人形でしかあるまい。主と仰ぐ者の無くなった家臣や分家の者どもも今までの主と不仲であつた子せがれには膝を折りづらかろう」

間隙を利用して何人かを味方に引き込めれば、なにかとやり易くなる。

「ふむ、やることが多いとどこから手を付ければよいかいささか戸惑うわ」

言いつつも王の顔には自然に笑みが浮かんだ。最大の障害が消え、残るは一跨ぎで越えてしまえる小石のような小者が数人残っているだけである。内、一番大きな石も近いうちに取り除かれることだろう。

「あの娘も良い拾いものであつたわ」

報告では、子せがれの代理に上げる予定の娘はなかなか筋が良いとある。まるで素人だったとは思えない呑み込みの早さで、騎士の礼をとつても見破られることはないだろうと教師役の騎士が太鼓判さえ押して見せたという。

「まったくでありますな。……ん？」

自身の独り言に追従した文官が訝しげな声を発した時も、王はまだ己の甘い夢から覚めていなかった。

「なんだ貴様は、護衛の兵など追加で呼んだ覚……ぎゃあああつ！」
国王を現実に取り戻したのは、文官の上げた断末魔と頼にまで飛んできた血の一滴だった。

「何が、まさか……あの者の言葉が真であつたと言うか」

先ほど目通りを願ってきたミゲルという大隊長が明かした『国王の暗殺計画』。混乱を狙った虚言だと捨て置いたことを王は後悔し、逃げながら叫ぶ。

「誰ぞ、近衛騎士団に伝えよ。第一王子^{シアン}が謀反を企てた、一隊をここに向け我が身を守り、もう一隊を用いて奴を誅殺せよ、と」

ミゲルは首謀者を第一王子だと言った。

「陛下は最近王女を気にかけているご様子、シアン様はこの所陛下が自分を差し置いて王女を女王に据えるのではとお疑いを抱いていらしたようです」

王女が偽物だと知るのは王と腹心、そして王女の身の回りの世話をする者のみ。第一王子からすれば、国内有数の貴族と結婚話の持ち上がっている王女は自分の地位を脅かす存在に見えたらしい。

「おのれ、ならばあの偽物を討てばよいではないか」

事実、王を狙うのは少々おかしい。もちろん、第一王子が父の暗殺に踏み切ったのも王女ではなく王を標的にしたのにも理由はある。「陛下、ご無事ですか？」

「おおっ」

近衛騎士の鎧に身をまとった人影を目にとめて王は歓喜の声を上げた。助かったと思ったのだ。

「うむ、余は無事よ。真っ先に余のもとに駆けつけるとは見事、のちに褒美を取らそう。その時は望むものを言うがよいぞ」

「はっ、身に余る光栄に存じます」

近衛騎士は思わず目を奪われるほど見事な騎士の礼をもって国王の言葉に応じると、鞘に手を添え抜刀する。王は現在暗殺者に狙われている状態、護衛に駆けつけた騎士が剣を抜くのは何もおかしいことはない。

「では……王座を頂きたく存じます」

「何！ まさかお前は……ギルバーオレストの子せが」

だから、騎士の顔に王が気づいたのはレイラの剣が王に届く位置まで近づいた後のことで。

「いいえ、陛下のお指図で浚われたただの侍女にございますわ」

銀の光と化した刃が身に届く直前、ようやく王は気が付いた。王子がなぜこのタイミングで暗殺などに踏み切ったのかも、誰が後ろで糸を引いていたのかも、そして——目の前の騎士をレイルだと思っていた自分の誤解にも。

「ようやく、すべてが終わったな。第一王子の誅殺にはお兄様が出向いているからお兄様が疑われることもないだろうし」

あとはレイラが侍女に戻ってしまえば疑う者は誰もいないという筋書きである。

「おっと、ミゲルも助けに行かないとな。まあ、主君暗殺に力を貸せないっていうのは騎士として正しかったんだろうけど」

ミゲルは王に言わなかったことがあった。第一王子の行った暗殺計画の裏で動いていたレイラ発案の暗殺計画。もっとも、そこまで打ち明けても信用されはしなかったであろうし、第一王子の計画を明かした直後に投獄されたミゲルには忠告することも不可能であった。

「まあ、部下を信用できないと足元を掬われるってことだな、うむ」
甲冑を脱ぐための空き部屋を捜して歩きながら、レイラは己の言葉に頷く。

「やったぞ、国王を討ち取ったぞー！」
「おのれっ、よくも陛下を……皆、奴らを一人たりとて生かして帰すなっ！」

レイラの背後から聞こえたのは、レイラの手柄を横取りした暗殺者の声といきり立った近衛騎士の声。きわどいタイミングで国王の呼んだ近衛騎士達が王の元にたどり着いたらしい。怒声や罵声に剣戟の音が混じり始め、レイラはかすかに眉をひそめた。

「加勢したいって言うのは偽善だよなあ」

戦う者のうち近衛騎士のほうはレイラとも長年の付き合いがある同僚達の筈なのだ。もちろん、姿を見られるわけにはいかないレイラにとって加勢はかなわぬことなのだが。

「そもそも、後悔するぐらいなら諦めなきゃいけなかったんだ。ここは悪役になっておこう」

自身に言い聞かせつつも、レイラは胸中で願う。

（皆、どうか無事で）

同僚の無事を願うのは偽善であり矛盾であったかもしれない

けれど。

「皆、すまない。そしてありがとう」

誰にも聞かれることはない謝罪と礼の言葉。やがて着替えを終えて鎧を始末したレイラは、逃げ惑う使用人や侍女に紛れて最愛の人が待つ場所へとたどり着くこととなる。

「姫、レイラはただ今戻りました」

これが、歴史に語られることの無かった国王暗殺劇の全貌である。

「こうして私は姫を王位につけることが出来たわけだ」

「出来た訳だ、じゃなああい！」

「うぐっ」

満面の笑みで戦果報告をしたレイラに待っていたのは、幼なじみの侍女に襟首を掴まれてガクンガクン揺すられる運命だった。

「心配したんですよ？ ミゲル様も戻ってこないし、私一人残されて……」

ただ一人の主なのだ。アンナからすれば心配なのは当然のことで、居ても立つても居られなかったのだらう。おまけに最愛の人までそばに居らず、ひとりぼっちだったのだ。

「すまない」

レイラは甘んじて受け入れていた。アンナの怒りを。

「だがな……人払いにしてあるとはいえ、今の私はこの国の女王の夫なんだぞ？ 人が見たらどう思われるやら」

「わかっています。ですが、レイラ様は私の……」

「うん、そうだ。幼なじみで、友達だ」

ずり落ちかけた宝冠を押さえながらレイラはアンナに笑いかけ、もう一方の手で抱き寄せる。

「しかし、こう、何だな……王妃さまになりたかったわけじゃないんだが、微妙な歯がゆさがあるな」

少年を少年のまま王位につけるには王位継承順位が足らず、かと

いつてこの以上の流血を望まなかったレイラ達は偽王女を偽女王に据えることで目的を達成とした。レイラの立ち位置については基本的に捕まっていたころと変わらず、しいて言うなら王女付きの侍女が女王付きの侍女にランクアップしたぐらいだ。

「普通の夫婦として少年と暮せるのはもう少し先か」

この後のシナリオだが『女王はやがてレイルの子を懐妊するも出産が難産となり、己の命を子にやってこの世を去る』というものになっている。当然、この時生まれたことになる赤ん坊はレイラが生むのだ。

「こんどこそ私の正念場だな。気合を入れて少年を押し倒さない」と

「レイラ様、その時点でいろいろ間違っていますか？」

「そうかもしれないが、私にとっては最優先事項なんだ」

王女が死んだことになれば少年ももう身代わりを続ける必要はなく、元の家に戻るなり適当な貴族の家に養子縁組されるなりしてレイラとの真つ当な生活を送ることが出来る。レイラにとってはあこがれのハッピーエンドが見えているのだ。

「ここで躊躇したら男じゃない。まあ、男ではないが……そんな感じで頑張ってみようと思う」

「ここは嘘でも応援しておくべきだと思うのですが、何というか……」

……

アンナは痛む頭を押さえつつ、ため息をつく。彼女の主人はこういう人であった。おそらくはこの先も振り回されるのである。

「それだけでなく、生まれてくる子供には年の近い友人が必要だと思うんだけどな。ほら、私達のように」

「いえ、仰っていることは正しいのですが……それはつまり」

もはや聞いてみなくても予想できる答えをアンナは口にする。

「うん、競争だ」

「競争だ、じゃなああい！」

主人のとんでもない物言いにアンナは思わずレイラの頭をひっぱたく。立場が変わってもいつも通りの二人の姿がそこにはあった。

-
完
-

篡奪劇のあとに（後書き）

いやー、長々お付き合いいただいてありがとうございました。

王様とお祖父様を倒し、レイラはようやくハッピーエンドを手に入れ……るまでもう少しかかりそうな感じもありますが、一応大団円となります。

後日談とか番外編は時間ができたら書きたいなとは思っています。

少年の弟さんとか放置しっぱなしですからね。

ともあれ、拙作を最後までお読みいただきありがとうございます。また機会がありましたら、どこかでお会いしましょう。

では。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0171s/>

わけあり姫と偽りの騎士

2011年5月16日05時25分発行